

つたえる、
うけとる、
つたえあう

INTERPRET

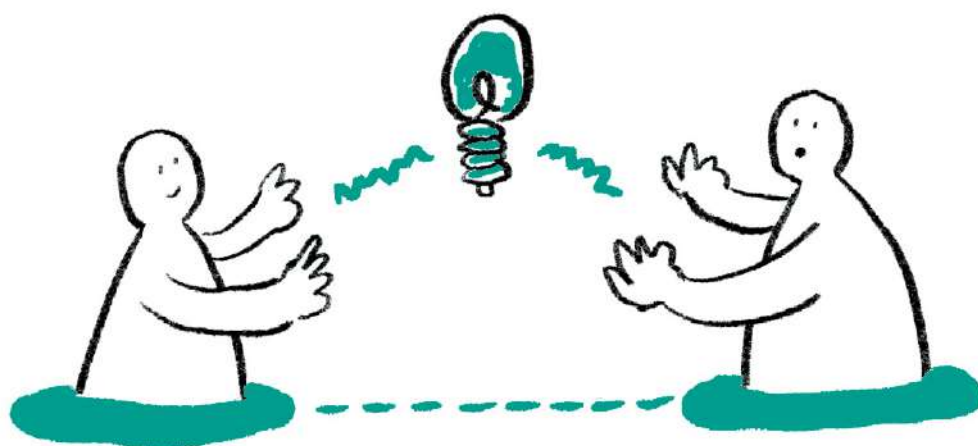
新たなコミュニケーションの
在り方をみつけるために



つたえる、
うけとる、
つたえあう

INTERPRET

新たなコミュニケーションの
在り方をみつけるために



ふたつの感覚からなる言語の間で

わたしは、家の中では手話という視覚身体言語^{*1}で、外の世界や学びの中では日本語という音声書記言語で会話や思考しながら過ごしてきました。父は、わたしが幼い頃から、植物や星、水の流れや生き物の動き、世界の成り立ちを、彼自身の手や表情、その身体にうつすことでわたしに教え、母はわたしの目をみて、ときに触れることから、対話する熱や愛、感情の深さを教えてくれました。一方で、家の外に出ると、そこには音声で会話する世界が広がっていて、保育園や街の人々の会話からわたしは少しずつ日本語を覚えていきました。学校での学びを通して、数学や文学、様々な学びに触れたり、友人たちとたわいもないおしゃべりをしたりする中で、だんだんとこのふたつの言語が持つリズムや間合い、それぞれの言語世界の違いについて意識を向けるようになりました。

視覚身体言語と音声書記言語^{*1}は、同じ言葉や単語を用いることもあり、よく似ているようにみえますが、それらは異なる世界や言語体系を有しています。それは聴覚と視覚という知覚の違いや、手や表情と口や喉といった使う身体器官の違いでもあり、異なる文法構造を持つことや、頭の中でのイメージの紡ぎ方の違いなど様々です。

父や母のように、ろう者それぞれの身体から織りなされる視覚身体言語は、記憶の言語であると思います。それは、伝え手自身の身体の中に眠る記憶を像として、その場に立ち上げる表現です。その人の経験の風景を断片的ではなく、そのまま丸ごと像として受け渡していくような「映像的」なイメージをつたえる力を持ちます。音声書記言語は、「線的」なイメージがあり、言葉を連ねていく言語です。だから、身体の記憶や立ち現れる像をつたえようとしても、記憶や

経験にじっくりくる言葉をうまく見つけられず、どうしても言葉では捉えきれないことが溢れてしまうように思います。

「みる言語」と「きく言語」の能動と受動の関係性の違い。記号や動きから想起されるイメージの構築方法。ふたつの異なる言語の間で通訳するとき、わたしは、いつももどかしさを覚えます。

たとえば、わたしがここに書く「森」という言葉から連想されるイメージは、読み手一人ひとりそれぞれに異なります。言葉ひとつからそれぞれの頭の中に像が芽吹くことは豊かですが、通訳としてその言葉を映像的イメージに変換して伝えようとするとき、どうしてもその像がわたしが表したイメージになってしまう。どうすれば、その人が思い描くイメージをそのままつたえることができるのか。どうすればその人の実感をつたえあうことができるのか。

こうした異なる感覚モダリティ^{*2}からうまれた言語の変換について考えようすると、人が自分の頭の中に想起したイメージをいかに他者につたえてきたか、を改めて問い直すことにつながるように思います。言語が思考をつくるとき、いかにその言語感覚によるイメージの広がり方や思考の違いがあるのか。一人ひとりの頭の中にある思考と想像の宇宙がどのように広がり、お互いにつたえあいを試みているのか。それは、アーティストが感覚やメディアによって積み重ねてきた表現の創造性や他者とのコミュニケーションが織りなす協働作業、その創発にも接続する問いです。

ここ数年、ワークショップやパフォーマンス、アートプロジェクトなど、表現創作の現場に通訳として携わる中で、そうした現場における通訳はその表現方法や環境、関係性を含めたコミュニケーションの応用実践なのではないかと考えるようになりました。受け取る感覚器官の違い、両者の視点、リズムやずれ、感覚の開かれ方、それぞれの言語特性を考慮した通訳環境、情報保障の在り方。参加と観客の主体の関わり、関係性。いかに両者の言語感覚に沿った制作環境を設計できるか、通訳者も制作者と共にその場に向き合い、時間をかけてより良い在り方を考えていけたら、と思います。

本書では、手話通訳というメディアの異なる言語を身体を介して通訳する方々に着目し、それぞれの身体知を語らうことから、つたえあうことの可能性、ひらかれた情報保障の在り方・行方を探っていきます。そもそも身体・体験・記憶が一人ひとり違う中で、そもそも同じ言語間ですら誤読や誤解がうまれる中で、どうしてつたえあうことができるのか。「つたえたい」と「つたわらない」の間を行き来しながら、それでも言葉を選び、行動し、それらを読み取り、ときに読み違えながら、わたしたちは共に在ろうとコミュニケーションを重ねます。その喜びや魅力、豊かさを共に味わう方法を紡ぎ、つくりだしていけたらと願っています。

和田夏実

^{*1} 視覚身体言語と音声書記言語についてはp7参照

^{*2} 感覚モダリティ…（それぞれの感覚器で感知する）固有の経験、質的な体験

本書の構成

積読、パラパラ眺める、誰かと一緒に考える、記憶の会話を回想する

本書は、視覚身体言語と音声書記言語の特性によって変化するコミュニケーション表現や思考について、手話通訳という存在・役割に着目し、「間」に立つものの視点やつたえ方、受け取り方、読み取りの技術を通して「つたえる、つたえあう」について、改めて捉え直そうとするものです。つたえ手と受け手とその関係性の中で成り立つ「つたえる」という行為、そして、関わり合いの中でうまれてきた「言語」。通訳者は、伝え手と受け手、そして通訳者自身も含めて、物事に対する一人ひとりの認識や捉え方が異なっているという前提の上で、自分自身の内言の世界を異なるメディアにのせて変換し—— 音声から手話に、手話から音声にというように—— つたえています。そして、その通訳はただ単に言語や意図だけではなく、つたえ手の思考の流れやリズム、その人らしい表現といった非言語の領域も含まれています。

日々自然と溢れ、紡がれていくコミュニケーションについて、こうした間に立つ存在の身体知や視点から紐解いていくことで、改めて「つたえる」「つたえあう」ことの意味や可能性、その深淵に触れることができればと願っています。

本書は、大きく3つに分けられます。

ひとつ目は、つたえること、コミュニケーションについて手話通訳の視点から解きほぐそうとするもの。ここでは、伝え手・受け手の個々の「わたしの世界」、「受け取るわたし」、「関係性の中で」うまれる言葉や表現に関する問いを整理し、コミュニケーションそのものを捉え直すための準備運動のような内容になっています。さらに、それらの内容と連動する「Communication Card」をつくりました。本カードは、通訳者へのヒアリングをもとに「つたえあう」ときに起こっているキーワードや問いを抜き出しています。

二つ目は、視覚身体言語と音声書記言語、それぞれの特性について語り合う座談会や、様々な表現の現場に携わっている手話通訳者・翻訳者による身体知を開く座談会、舞台や映画など表現手法が異なるメディアで活躍されている手話通訳者のコラムを収録しました。各記事では、感覚モダリティが異なる中での思考や表現について、たくさんのヒントが隠れています。

三つ目は、筆者がナビゲーターとして携わったTokyo Art Research Lab(以下、TARL)「東京プロジェクトスタディ1| 共存する身体と思考を巡って—東京で他者と出会うために—」での取り組みをケーススタディとして、アートプロジェクトにおける想像もしなかった環境下でのコミュニケーションに対して、オンラインであれ、オフラインであれ、どのような通訳環境づくりの可能性があるのか、実践の中で得た気づきをまとめました。

本来、手話通訳という仕事には守秘義務があり、その場で起こったことについては外部に共有することができません。しかし、今回、TARLのスタディ1内で起こったコミュニケーションについて、共有知化を進めるにあたって、スタディ1メンバー、関係者のみなさまに掲載の許可・ご協力をいただきました。この場をお借りして、ご協力いただいた多くの方々に心より感謝申し上げます。

本書は、コミュニケーションに含まれる全ての要素を網羅したものではありません。本書を手にとってくださっているみなさんの世界にこそ、予想もつかないようなコミュニケーションや関係が広がっている。その前提のもとに、一人ひとりが関わりの中で織りなしていく言語や文化、協働からの創発、つながりあうことの可能性について、そこに眠るコミュニケーションの暗黙知について考えることから、ともにほぐし、新たな伝達方法を開拓するためのきっかけとなれば幸いです。

※言葉と表現の定義について

本書では、日本語・日本手話の両方の言語についてふれていきます。その人自身から溢れたものが視覚と音声のそれぞれにあてはまる場合、「言葉・表現」という形で示すことで、日本語と日本手話のどちらかを(限定せず)表記しています。

- 2 はじめに
- 4 本書の構成
- 6 もくじ

10 わたしの世界



20 受け取るわたし



33 視覚身体言語と音声書記言語を行き来する

42 それぞれの言語の中でコミュニケーションを発明する

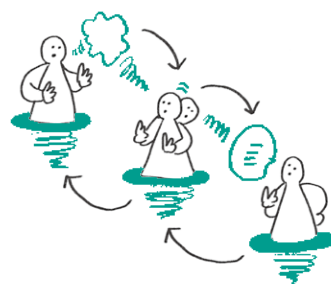
45 言語と思考のあいだでゆらぐ



59 コラム：イタコに似た仕事

61 コラム：伝える

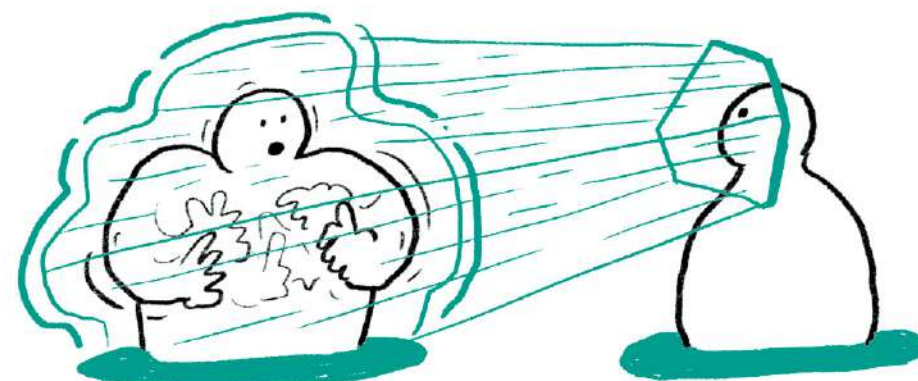
62 おわりに



25 関係性の中で

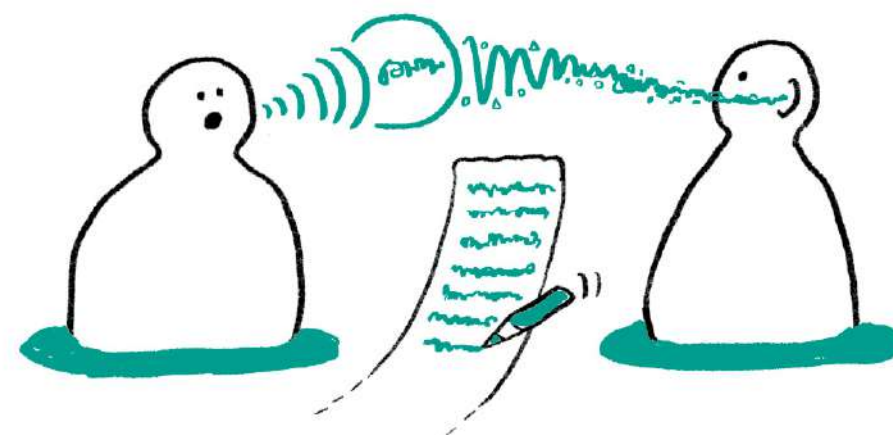


53 東京プロジェクトスタディ1



視覚身体言語

主に視覚と身体を媒体とする言語。手や顔、上体の動きなどを媒体とし、その手の動きや眉の動き等に文法構造を持つ。本書では、言語的な文法構造や記号について解説する形ではなく、一人ひとりの中でその場で生まれた表し方を尊重しながら、視覚での伝達の手法や思考の流れ、また身体を媒体として相手につたえることからうまれるメディアの可能性について考えていきます。

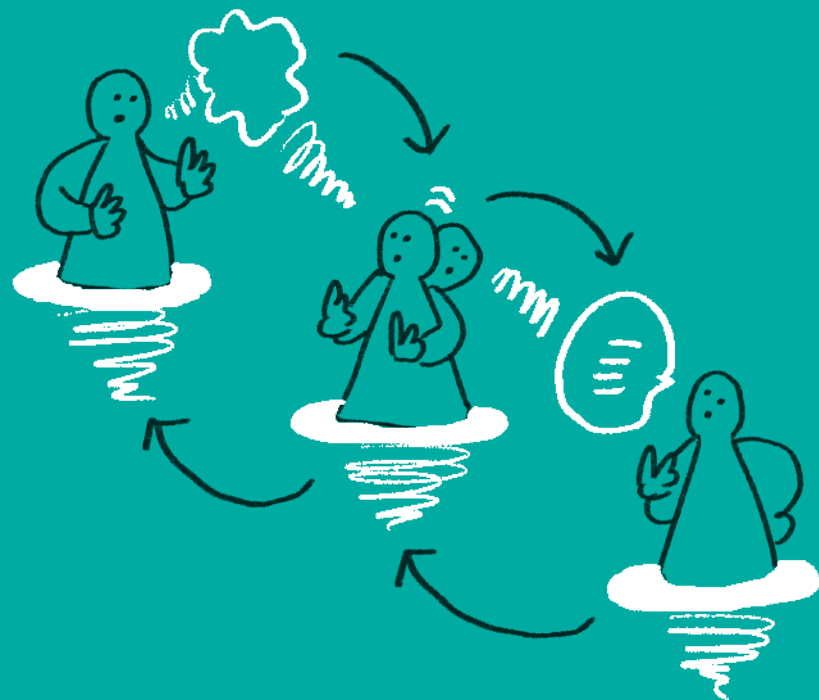


音声(書記)言語

主に音声を媒体とする言語。最小単位の音の組み合わせから成る、線的な言語。記録伝達の方法として、書き記す、書記言語でもある。本書では、主に対面や場を共有している際のその人の発話の捉え方について考えていきます。音の記号を線的に並べていくこと、カテゴリーにわけて名付けることで発展する音声言語について取り上げます。

*対面では音声言語、本や情報取得の際には書記言語となり、同時には発生しないため、本書では、広く日本語を指す際には音声(書記)言語、対面状況では音声言語、本や記述情報に関しては書記言語と表記する。

視覚身体言語と 音声書記言語



コミュニケーション。

それは日々とてもありふれたものとして、わたしたちの周りに存在しています。

何気なく家族におはようということ、お店で店員さんに欲しいものを注文すること、自分の頭の中のひらめきを誰かに共有すること、そして、自分自身との対話も含めて。それらは、自分の中で醸成されていくものもあれば、他者との語らいによって醸成されるものもあります。正確さが求められることもあれば、たわいもなさ自体を共有することが大切なこともあるでしょう。

ここでは「つたえる」について考えていくにあたって、わたしたち自身が、日々、誰と、どんなコミュニケーションをしているのか、その一つひとつを改めて捉えなおしてみたいと思います。そしてそれは、「つたえあう」関係性の中で、どんなふう膨らんでいったり、つながりあったりしているのか。どんな形で自分の中に記憶として蓄積され、相手にはどんな形で残り、どんなふうにつたわっていくのでしょうか。

その手がかりのひとつとして、ここでは、手話通訳という立場や視点をもとに探っていきます。手話通訳とは、「視覚身体言語」と「音声書記言語」という異なる言語体系とメディア（声や文字、身体等）をもつ言葉を、手話通訳者自身の身体を通して翻訳し、伝達するコミュニケーション技術です。

たいてい日常の会話には、相手（複数人の場合も）とわたしという向かい合う構造しかありません。けれど通訳という立場は、そのどちらにも属さず、コミュニケーションを発する行為の主体としては存在しないものの、その関係性の中で言語の変換と伝達を担います。たわいもない会話、大切な話、意図を持ってこうして欲しいとつたえること。そのそれぞれの「つたえあう」間（あわい）の視点として中立に立つとき、どんなことが起こり、何をつたえることが難しいのか。間の視点から「つたえる / 受けとる」について考えてみます。

*MINI INTERPRETER PERCEPTIONとは

手話通訳者の視点でコミュニケーションを捉えるとどんなことがみえてくるのか。ヒアリングからみえてきた知見やヒントをまとめました。

わたしの世界



まずはじめに、あなた自身の世界について。あなた自身の思考や口癖は、どんな経験や記憶からなるものですか？そしてそれは、どのようにあなたの口や手から溢れ出る言葉や表現につながっていますか？たとえば、あなたは「基本」という言葉や表現をいつどこで、初めて使いましたか？そしてそのイメージは、どのような形で変化してきたのでしょうか？

思考のための言語・内言語

人間の言語には「内言語」と「外言語」があり、内言語は自分の中で思考するための言語、外言語は外の世界に自分の言葉を出力する会話などの言葉・表現のことを指します。

たとえば、明日から旅行に行こうと準備をしているとき、頭の中で何が思い浮かびますか？旅行中の姿や風景の映像が浮かぶという人もいれば、持ち物リストが浮かぶ人もいるかもしれません。あなたの内言*の世界は、あなたが構築する世界認識や記憶の引き出し方。そこには一体どんな言葉やイメージがあるのでしょうか。

*内言…音声を伴わない自分自身の心の中で思考のための道具としてもちいる言語。対比として、伝達の道具、他者と会話するための社会的言語としての外言がある。



MINI INTERPRETER
PERCEPTION

その人の言葉や表現を翻訳していくためには、どうしてそこに至ったのか、その人の思考の流れやイメージのつながりを考え、想像する必要があります。伝え手・受け手の頭の中の内言の世界はどう広がっていて、それがどんな方法で表されるのか。双方の頭の中までたどってそれぞれをつなぐつたえ方。考えてみたいのは、その内言の世界は一人ひとり、モードやメディアも異なっているということ。映像的に考える人、紙に描くイメージが浮かぶ人、手で触ったときの感覚が蘇る人、頭の中にいるもう一人の自分と会話する人。あなたは、そしてあなたの隣にいる人は、一体どのような内言の世界を持っているのでしょうか？そしてそれを最もぴったりの方法でつなぐには、どんな方法があるのでしょうか。

内言の世界は、一体どのようにつくられてきたのでしょうか？それを探る手立てのひとつとして、様々なものに触れ、感じてきた、記憶の積み重なりについて思いを巡らせてみたいと思います。自然に囲まれた暮らし、夕暮れの色、香りや触れたもの、かつて食べたあの味、慣れ親しんだ街の風景。〇〇のような、といったときにそのイメージが指し示しているものは、あなたの記憶の体験であり、その眼や手、体に残ってきたもの。「森」といわれたとき、あなたの頭の中にはどんな森が広がっていますか？それは、どこでいつみた景色なのでしょう？そこに香りはありますか？



どんなに誰かの記憶をみたい、と願っても頭の中をこじあけてその像をみることはできません。でも、ともに体験を重ねることで、あのときの、あの中の、あの作品の……というように、どんどん記憶の重なりは増えていきます。記憶の共有を重ねるほど、「あのときの」で想起されるイメージは豊かになる一方で、そのイメージ自体はそれぞれの人にしかわかり得ません。誰かの記憶を追いかける。それには、ともに何かを味わい、鑑賞すること、同じ時代を過ごすこと、そのときの空気を想像するなど、様々な方法が存在します。通訳者が伝え手の記憶に並走できる環境をつくるのが、少しでも伝達の濃度をあげる方法なのではないかと思います。

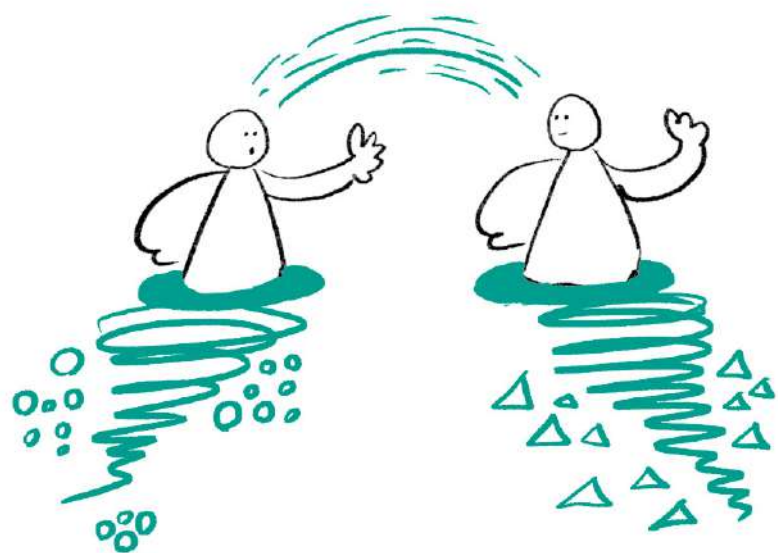
仕事や学校、サークルや趣味、とある学問領域。そこにはそれぞれ特有の言葉や表現がたくさんあり、独特の専門用語の世界が広がっています。専門的な言葉や表現は、新しい表現が増えるほどに、そのコミュニティ、文化が豊かに育まれていきます。ただし、専門用語は、その知識や共通認識を持たない人には、何を意味するのか全くわかりません。それぞれの世界にはどんな概念や用語、道具があり、どんな方法でそれぞれを名付け・つくり出してきたのでしょうか。



専門独自の世界、そこには特有の考え方やルール、大切にされること、タブーなどが存在します。通訳をするとき、その世界独自のルール・文脈を理解しなくては、意図や言葉の重み自体を伝えることはできません。新しい言葉はその分野にどんな発見をもたらしたのか、看護や保育、法律や技術、アートなど、各分野が重ねてきた文脈とは一体何か。そこに飛び込み、複合的な話者として通訳者自身も自分の世界を広げることが、通訳の可能性を広げていくことにつながると感じます。また、それぞれの分野に属する話者のコミュニティが醸成されていくことで、その世界に触れるための言語や表現がうみだされ、さらにその領域・分野の可能性を押し広げていきます。

言葉・表現 関わり・引き出される

コミュニケーションは相互の関係の中で生まれ、その言葉や表現もまた関わりあう誰かとの間で生まれていきます。家族や友人とのたわいのない会話、先生や上司との会話、初めましての人との会話。それぞれの関係性の中でしか交わされない表現や言葉。あなたは、あのひとどんな会話をしていますか？そのひといるときに出てしまう自分は、いったいどんな姿で、どんな言葉や表現を使っていますか？

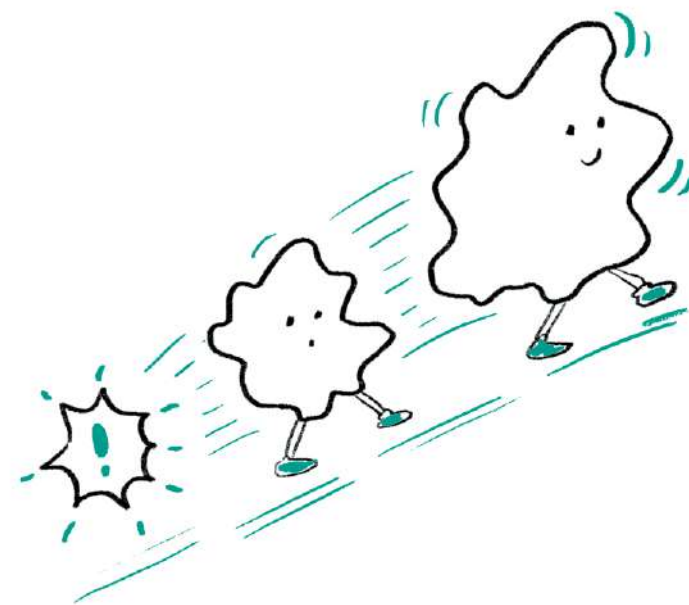


MINI INTERPRETER
PERCEPTION

関わり合いの中から生まれる言葉や表現は、関係性の文脈の中で構築されていきます。とある家族は、お風呂のことをずっと「ちゃっばん」と呼び、手話にもホームサインと呼ばれる家族間で生まれた手話表現があります。そこでの共通言語は、特有の関係の中で生まれ、またそこにはだいたい「暗黙の了解」が横たわっています。その間に立って通訳することは、自分だけがわからない記号を翻訳することになり、みたこともない記号を翻訳していくような感覚に近い。関係が構築された場に、どんなふうに通訳者は在れるのか。この知らない世界の文化のコードや「暗黙の了解」を察知し、そこにセンサーを働かせ、ときに確認をとりながら、よりよくつなぐ方法を探っています。

表現 生まれゆく言葉・

新しい概念や新しい事象・ものが生まれた瞬間、そこに新しい言葉もうまれます。ニュースやSNSなどで瞬く間に広がっていく言葉や表現もあれば、コミュニティやプロジェクト、家族の間だけでひっそりとうまれ、ゆっくり育まれる言葉や表現もあります。新しく生まれた感覚や概念、そして発見したものやことに、あなたはどんな言葉を名付けますか？その言葉や表現は、まだ見ぬ世界と接続する手がかりとなり、それらをともに考えるきっかけをもたらします。



MINI INTERPRETER
PERCEPTION

新しい言葉の背景には、その言葉が生まれた社会的、文化的な事象があります。そしてその言葉がどんなシーンで使われ、どのように広がっていくのかまで含めて捉えてみる必要があると思います。新しい言葉や表現が様々な場面で生まれ、それは身体感覚やつたわりやすさとともに自然淘汰されていき、いつのまにか統合されていく。公的な機関が発表したものであっても、馴染まなかったり、コミュニティの中で生まれたものがいつのまにか誰もが使うものになったり。そういった自然な発生により言語としての強度を持つこと、それ自体が言語たらしめているように思えます。

「水脈」の運動法則

その人らしさ＝

人にはそれぞれ、その人らしさの水源、水脈のようなものがあります。それはその人の行動や意思決定の源になるようなものです。心がときめき、突き動かされてしまう経験を思い出してみてください。あなたの中にあるその行動原理とは、一体何でしょうか。ある行動するとき、何かを選択するときに、いつのまにか自分の指針となっているもの。あなたの中には、どんな水脈が眠っていますか？

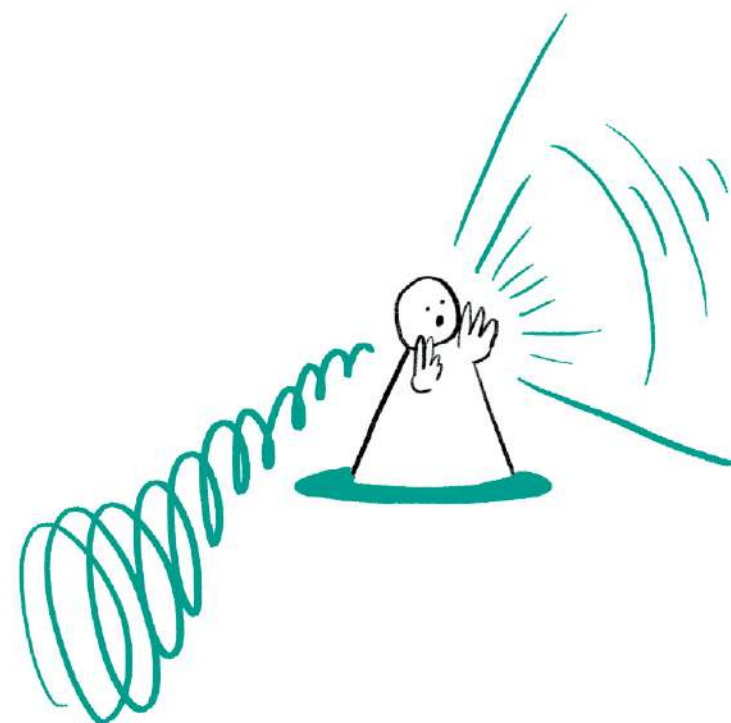


MINI INTERPRETER
PERCEPTION

誰かのことを知ろうと、その人の本を読んだり、経歴を調べたり、様々な情報を得ていく中で、その人の行動原理や水脈を発見することがあります。これが好き、この状態の自分が理想的など、その人の中に眠っている願望の部分。それは、周囲が感じる「その人らしさ」かもしれませんし、同時にその人自身の「在りたいわたし」かもしれません。通訳として、伝え手のときめきはこの辺なのかしら、と探りあて、想像しながら通訳することで、その人の水脈の流れに乗りながら、その人自身の言葉を熱を持ってつたえることができるような気がします。

（ ）の中のこと 意図・想い／

言葉や表現を発するその奥には、意図や想い、目的が存在しています。「こうして欲しいな……」という本音の部分。つたわって欲しい、でも言葉にすると直接的すぎるというせめぎ合いの中での、（ ）の中に在る想い。たとえば、家族との会話での「醤油どこにあるの？（あわよくばとってほしい）」「そこにあるよ（自分でとりなさい）」など、（ ）の中の想いは、様々な言葉、会話の間に潜んでいます。ときを経ることでコミュニティにうまれる不思議な会話のルールやつたえ方の作法。異なる文化があるこの世界で、その（ ）の部分は、どんな意味や目的を持つのでしょうか？



MINI INTERPRETER
PERCEPTION

異なる文化や文脈の中でこの（ ）の中の想いというのは、非常にやっかいなコードとして存在します。視覚身体言語の世界では、視線や手の振り方、触れ方が様々な意味を持ち、音声言語の世界では、言葉のいい回しなどから意図を汲み取って欲しいという（ ）の中の想いが見え隠れします。ただし、そうした（ ）のコミュニケーションが成立するのは、あくまでも前提を共有できている場合のみ。「きつつたわるはずだ」という前提でのコミュニケーションは、ときに大きな認識のずれをうむ危険性があります。お互いに（ ）の部分を開きながら向き合おうとする姿勢が、わかりあえなさをつないでいくコミュニケーションには大事だと思います。

リズム・ノッキング・揺らぎ

「……あの～ええっと……」と口ごもるとき、もしくは、手話で表す最中に指が宙を巡っていくとき。次の言葉を探したり、思考を巡らせているときにこそ、その人らしさが灯ります。迷いや葛藤が揺らぎとして現れる瞬間、ざらっとしたその人らしさが立ち現れます。そして一人ひとりの思考やスピードの違い、そのときの体調、天気や温度、今、居る空間の空気がつくりだすリズムなど、様々なリズムがこの世界にあり、わたしたちはその中で、そうした様々なものに影響を受けながら自分のリズムをうみだしています。

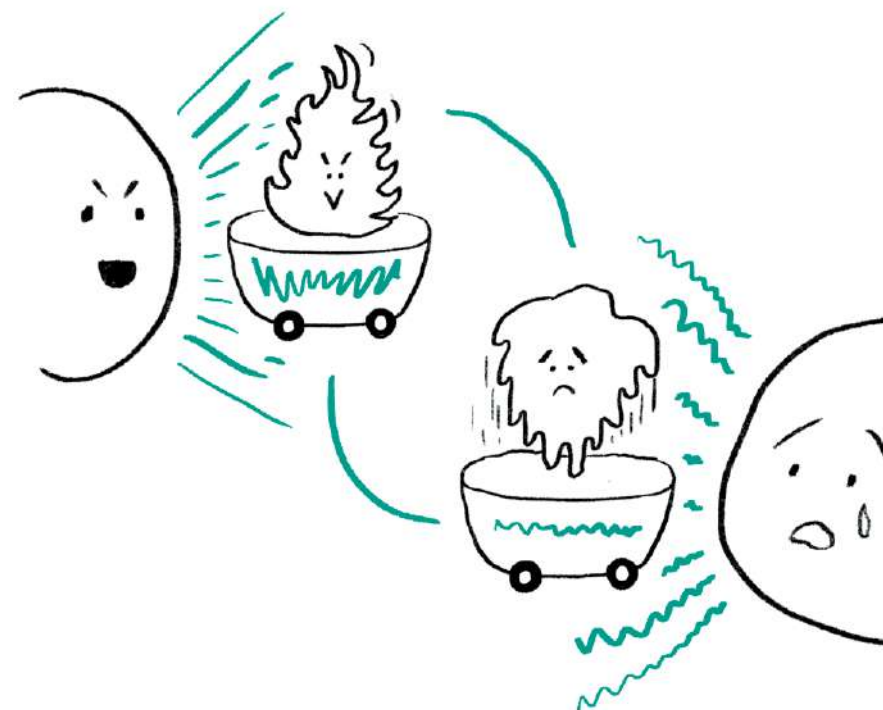


MINI INTERPRETER
PERCEPTION

リズムやノッキング、空気をつたえるのはとても難しい。間に立ち、その人自身の熱やリズムへ乗り移るようなイメージでつたえる努力をします。伝え手の温度や空気感、その人の口や手から溢れるリズムの数々に身を寄せて、空気をつたって相手へ届けていく。しかし、通訳の変換には時間的问题があるゆえに、どうしてもズレが発生します。間をいかした笑いや思考のテンポ、身体から溢れ出る特有のリズムは、ズレると途端に伝わらないものになってしまう。ズレを許容しながら、どう場を共有し、リズムをつくっていくのかを考えていく必要があります。

温度について

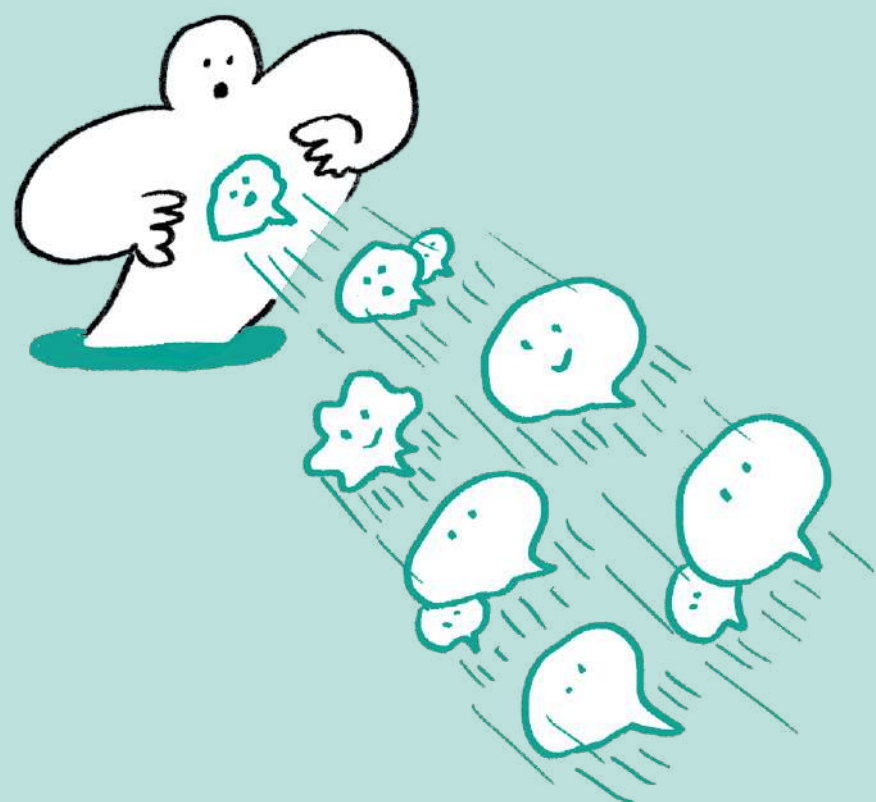
何か好きなものや感動を誰かにつたえようとするとき、その人から発される言葉や表現は、熱を帯びます。その熱はだんだんと周りに伝播し、いつのまにか居合わせた人の間で、気持ちが持っていられるような感覚になったり、じんわりと感動の温度がつたわっていったります。この温度・熱はその人自身の興奮や感動で体験を通して、その人自身の心の中から沸き上がってきたもの。あなたはどんなとき、どんなことに発熱しますか？



MINI INTERPRETER
PERCEPTION

通訳が難しいことのひとつに「温度」があります。言葉にその人の感情や想いが乗った瞬間、それは熱を持ちます。しかし、その熱々の感覚をつたえようとしても、通訳という別の身体を介してしまった瞬間、さっと冷えてしまう。それはまるで熱々の唐揚げが冷たくて硬くなってしまったときのボソボソさ。介在する身としても、その人が持つ体験の熱量をそのままに、どうにか温度を保ったまま届けたい。その人の感情・温度がどこから来るのか、その人のギュッとした想いに触れ、その人の感覚に飛び込み、その人自身の目を通してつたえたいことの魅力に触れられたとき、ほんの少しその温度をつたえられるような気がします。

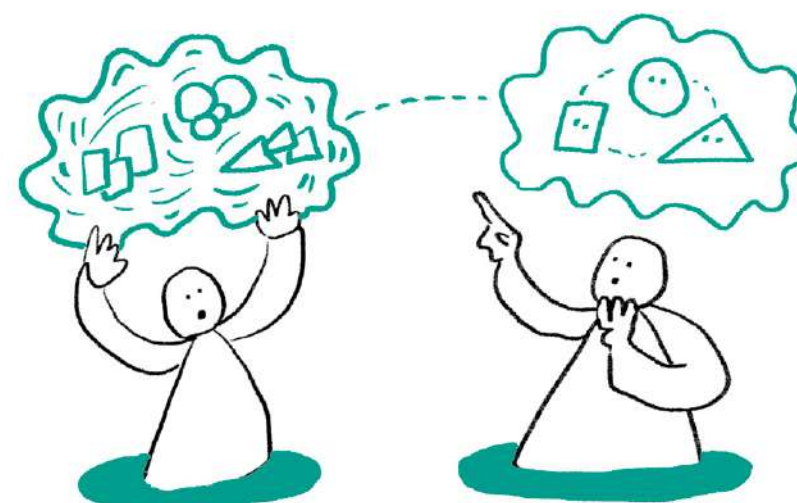
【受け取るわたし】



あなたは誰かと会話するとき、どんなふうに相手からの話を、言葉を受け取っていますか？それぞれ感覚や思考も全く違う中で、発される言葉や表現を、自分の中の体験と照らし合わせながら相手のことを理解しようとする。そこにはどんな体験が隠れているのでしょうか。

受け取るわたしの世界

伝え手自身の世界に対して、受け手自身の世界もまた確かに広がっています。たとえば、会話の中でお互いに「わかる!」と思ったとしても、その理解の背景には、伝え手、受け手それぞれに全く異なる体験が紐づいているものです。こうしたそれぞれに異なる記憶や体験を交換し合いながら、お互いの背景に触れる。もし、理解できないことがあっても、共感できる部分を探したりする。コミュニケーションには、そうしたお互いの価値観の違いに触れ合う楽しさがあります。



MINI INTERPRETER
PERCEPTION

文化も言語も違うもの同士の間で通訳をするとき、それぞれの背景の異なりをどのように互いの文化圏での想像できる形に変換してつたえるかは、非常に重要なポイントです。言語による文化の違いや、個人に紐づく体験がそれぞれに違う中で、受け手自身の文化や体験、経験と照らし合わせたときに、どんな例としてつたえると理解・想像することができるのか。伝え手の文化圏のコードを受け手の文化圏のコードに変換していくというつなぎ方は、どちらの言語・文化をも認識し、通訳するという、通訳者にとって探求し続けていく領域だと思います。

異なる背景を持つ者同士、完全にわかりあうことは難しくても、想像するということを通して、わたしたちは歩み寄ることができます。何をつたえたいのだろう？どうしてこの言葉を使っているのだろう？どのような意味を持っているのだろう？それぞれの世界が違っても、同じ方向に近づけたり、喻えたりすることで理解しあえることも。相手の世界を想像する、それもまたつたえあうことの醍醐味ではないでしょうか。



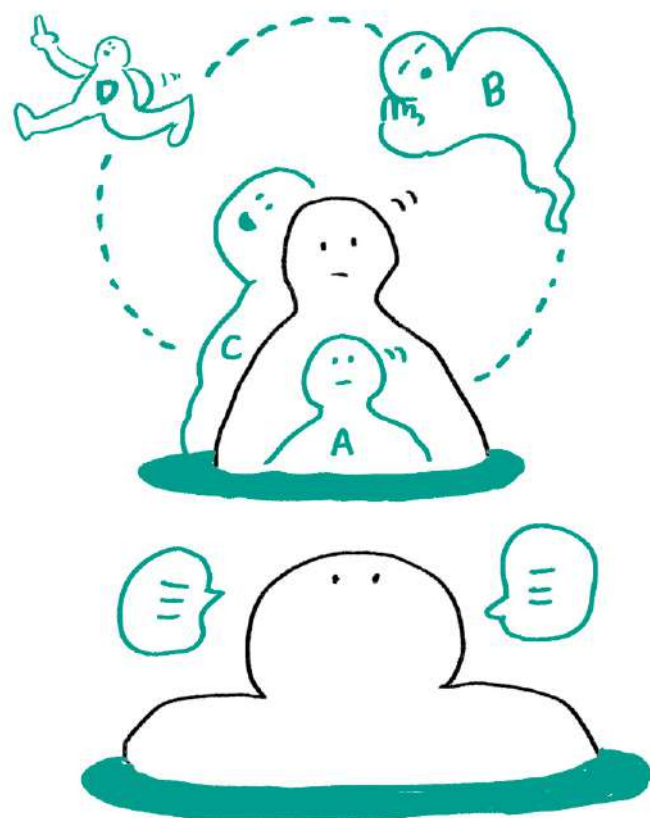
この人はどうしてあいつたんだろう？あの人はどうしてこのいい方をするんだろう？そうやって想像を巡らせながら考えてみると、受け手のわたしと伝え手との位置関係は向かい合う関係性ではなく、伝え手自身に乗り移り、重なるような関係となります。相手の眼差しに自分を重ねることで、今までみえてこなかった景色がまた立ち現れ、伝え手自身が見えてくる。そうして初めて気づくことや広がることはたくさんありそうです。とはいえ、そこに現れた景色やその人は、あくまでもあなたの想像の中の存在。本当のこと・想いは、その人自身にしかわからないもの。もしかしたら、その人自身もわからないことかもしれません。

誰かと会話をするとき、相手はあなたの話をどのくらい受け取ってくれていると感じますか？そして、あなたは相手の話をどのくらい受け取っていると感じていますか？つたえるとは、伝え手からの会話の矢印が一方通行に届くように思えますが、熱量をもって受け取ろうとすることで、はじめて成立することがたくさんあります。100%ぴったり同じ情報や想いを互いに渡しあうことはできなくても、10：10の力で受け取ろうとしたとき、そこには見えてこなかった景色や情報が入ってくるのではないかと思います。



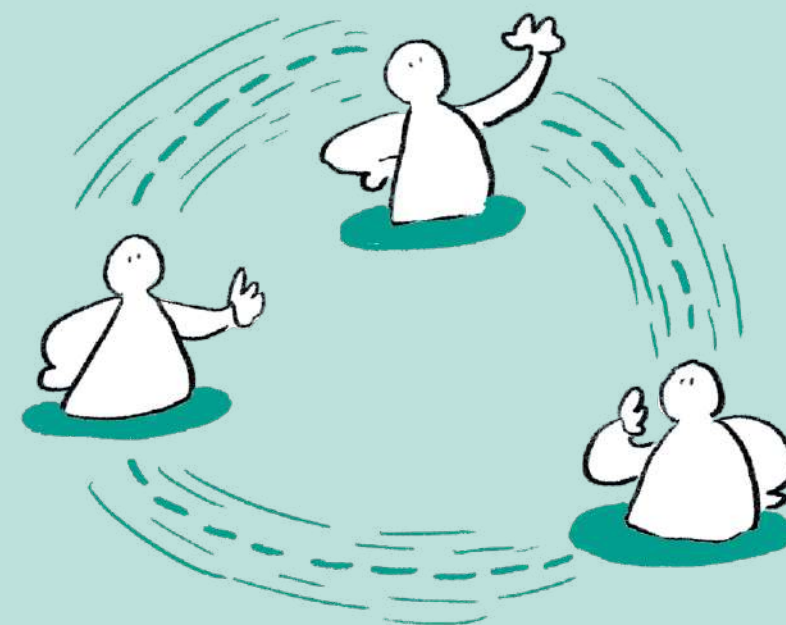
この熱量の値は相手の話す内容、意図、つたえ方と自分自身との相性によっても常に変動していくものです。相手の熱が高まるほどに自分の熱が冷めてしまったり、今は受け取る力がゼロです、なんてときもある。間に立つ中で、「＝（イコール）」を目指す中立的な存在としては、10：10の関係性の中で「＝」を担いたいけれど、それはそうそう簡単なことではありません。熱がヒューンと下がったとき、そこにはどんなことがあったのか。自分の熱を保てないとき、どんなことがあなたに起こりますか？

誰かの話をきいているとき、あなたの意識はどこにありますか？次に自分が話そうと
思っていること？とある言葉が引っ掛かる？もしくは、目の前の街の風景や今夜の献
立？意識は、その後の会話を変化させていきます。うわの空が新たなアイデアをうむ
こともあれば、瑣末な問題を投げかけてしまったことで、その議論で終始してしまうこ
とも珍しくはないでしょう。意識をどこにどうに集めたら、議論が活性化されるのか、
あえてバラバラな意識から突破できることもあるかもしれません。



視覚言語と音声言語ではその意識の行方や置き方が異なります。たとえば、みる言語である視覚言語は、話者の語りがその人の身体を通して表され目で受け取ります。一方、きく言語である音声言語は線的で流動的。そのため、意識の行方は次にどこに向かうのか予想できません。このことを南雲麻衣さん(p33)は「迷える言語」と呼んでいます。話しながら自分でも迷ってしまう、それもまた音声言語の特徴なのかもしれません。「みる」という行為は能動的かつ選択的に意識して行うものであるのと対照的に、「きく」という行為は受動的に、勝手に情報が耳に入ってくる状況です。そうした行為と意識の違いが、それぞれの思考や語りの行方に影響していくこともありそうです。

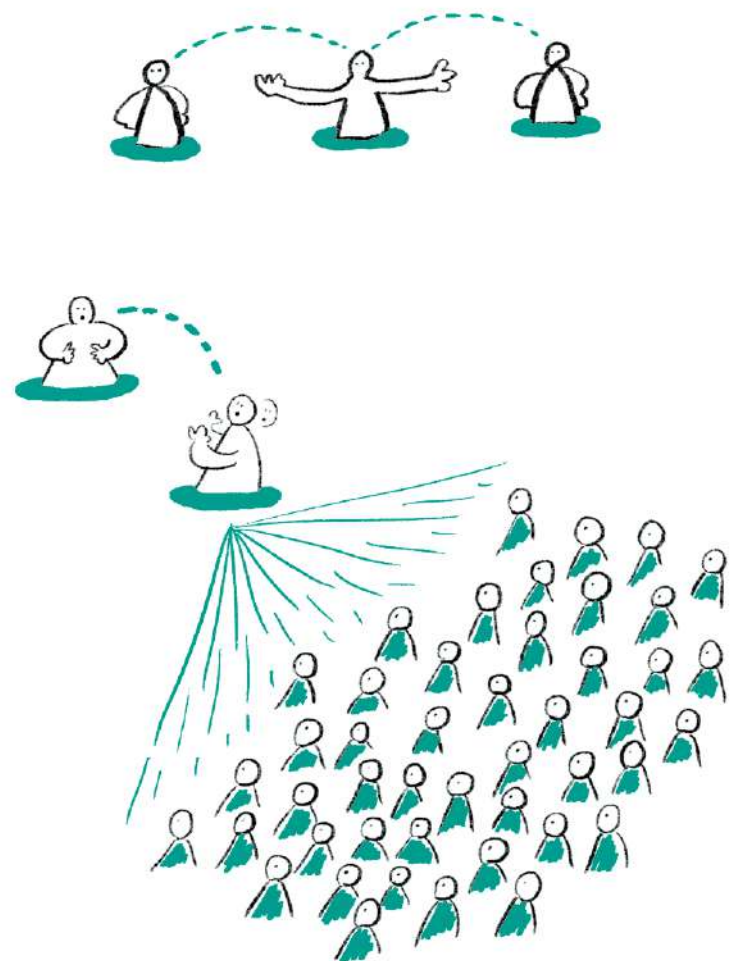
関係性の中で



「つたえる」ということは常に誰かと誰かの中に発生します。ここでは「関係性の中で」と題して、関わり合いの中でうまれる言葉・表現について、どんなふうになを、つたえているのか、相互の関係性の中で発生していく対話について考えてみます。この人との間でしかうまれられない言語や思考。誰から誰に、どんな方法で。頭の中に、誰かや場を浮かべながら、読んでみてください。

誰から誰に？

つたえあうとは関係性の中で紡がれるものであり、それはふたりという最小単位から、100人、1000人という大規模な複数単位の場合もあります。また、特定の対象がない場合でも思いがけない人に届いてしまう場合もあります。誰に向けてつたえたいことのなのかによって、つたえ方やつたえる状態のつくり方、考え方も変わってきます。つたえあうとき、互いの矢印はどんなふうどこに向かっていますか？そして、その関係性やエネルギーはどのような状態ですか？

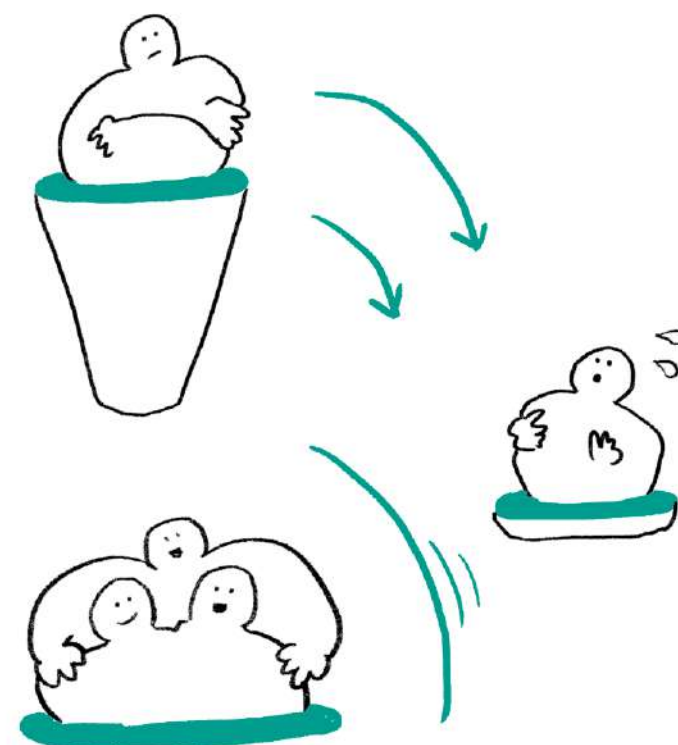


MINI INTERPRETER
PERCEPTION

つたえあいの中で、受け手が誰なのかということは非常に重要な要素です。通訳としては、受け手にとってつたえ方を工夫することやその人の文化に紐づいて話を整理・例示することはとても大切だからです。わたしたちは無意識的にも意識的にも、関わり合う相手との関係の中で表現をつくり、言葉を紡いでいます。こどもに対してはこどもの言葉で、初めましての人にはその距離感で、年齢や距離にあわせて言葉や表現を選んでいきます。相手によって、自分自身も変容し、その人との「わたし」がうまれていく。そうして誰から誰へのつたえあいの場で、様々な瞬間のわたし / あなたが絶え間なく生まれ、変化していきます。

場の関係構築

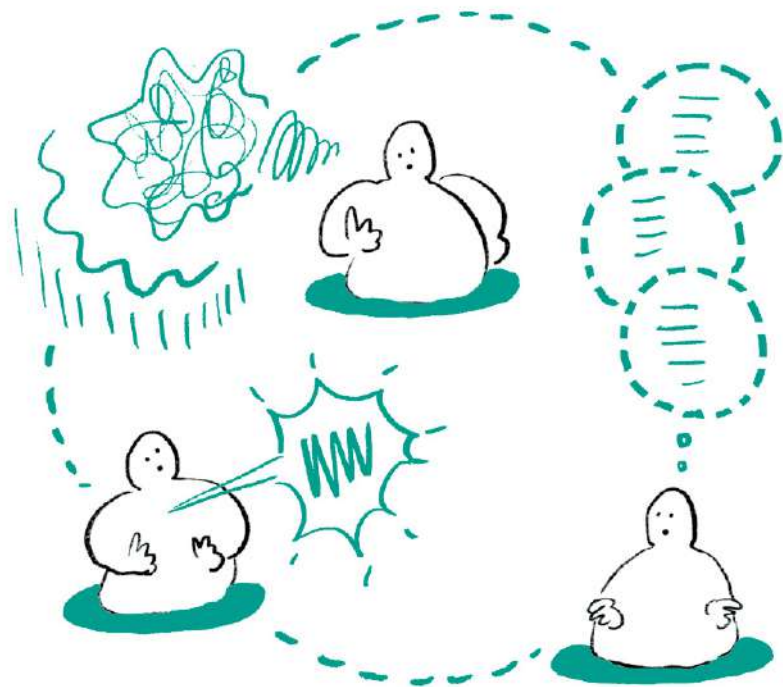
人と人とがコミュニケーションするとき、そこには、ときに力関係がうまれることがあります。社会的属性や意思・主張のバランスなど、場の持つ関係性は、それぞれの存在の濃度をコントロールしてしまったり、引き込んでしまったり、さまざまな危険性を孕みます。いかに互いにほぐしたりずらしたりしながら、関係を構築することができるのか。そこでは情報量や言語話者のバランス、個々の特性が持つ関係について考えていく必要があるのだと思います。



MINI INTERPRETER
PERCEPTION

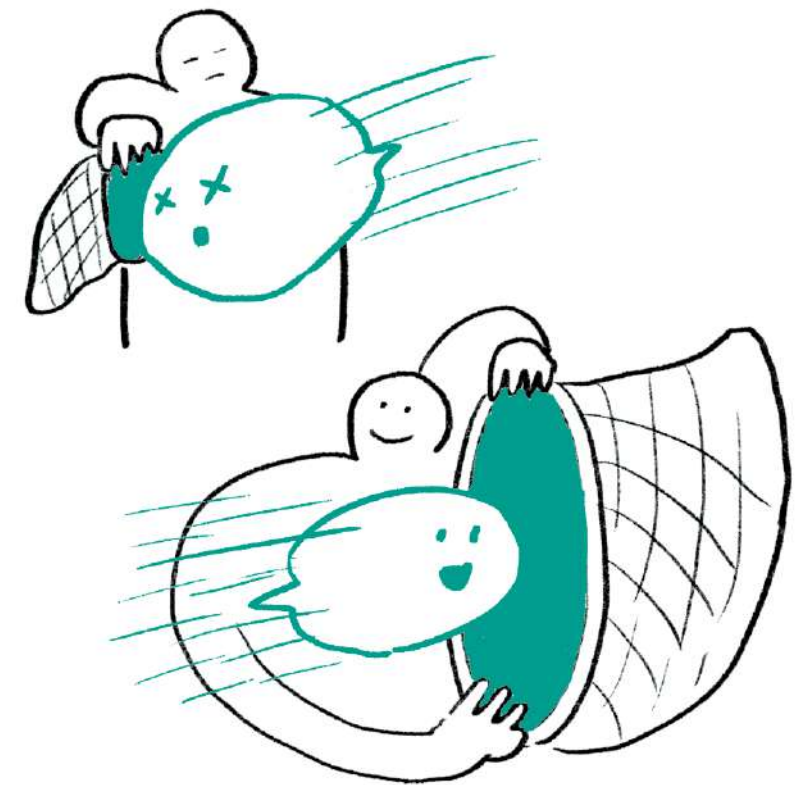
通訳として意識・注意するポイントに、コミュニケーションの場の関係がどう構築されるのかが挙げられます。それは言語の話者のバランスや、人々の関係性、会話のテンポやスピードだったり、それぞれの語りの量によって左右されます。前提とする文脈・世界観、誰かのうなずき、空気の流れにのまれてしまうこと。独特の空気をどう翻訳するのか、それぞれがズレた際に待ってください、と通訳として入れるかどうか。コミュニケーションの場において、中立の立場として、一度状況を整理してみませんか？と提案できるような状況や設定をつくることもまた、より良いコミュニケーション環境づくりの可能性を広げていくことかもしれません。

誰かが話しているとき、そのエピソードや言葉に想起され、次の話を投げ込む。コミュニケーションは創発であり、いつどうやって話す権利をとるのか、という闘争でもあるように思います。対話の場では、複数の同時に話すことはできません。常に誰かの話から、次の人がそれを待つ、そうしているうちに消えてしまった会話の道筋や可能性は幾多にもあることでしょう。いいなかったはずのことが、流れの中で消えていく、もしくはあのとき、この瞬間に、権利が誰に渡ったかで意思決定が揺らぎ変化していくこともあります。



話す権利とタイミング。ある話題が過ぎ去った後に、「あのとき」と再び切り出すのは難しくズレがうまれてしまうことがあります。しかし、通訳を介す場合、どうしてもその性質上ズレを伴い、タイミングを逃してしまうことが発生します。意見を出せるタイミングや場を開かれたものとする、状況を共有しながら、足並みを揃えながら、議論や会話をする。付箋を使ってみんなで描く、チャットで情報を揃えるなど、工夫できることはまだまだ多様にありそうです。

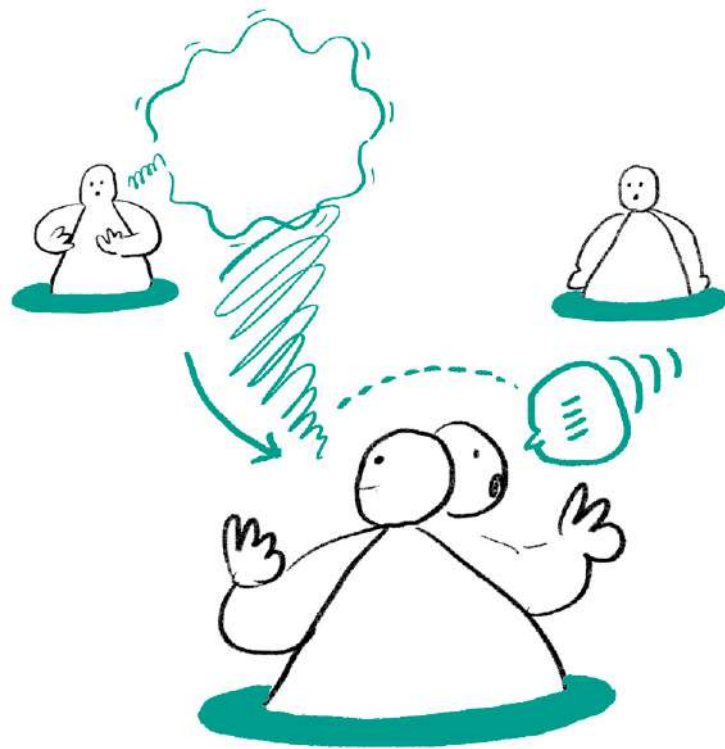
あなたは「つたえたいこと」をどのような順番でどう話しますか？時間の流れに沿って、頭に浮かんだままに、順序立てて、全体から部分へ、事例を中心になど、思考の流れや変遷は人によって様々に異なっています。つたえる相手の理解や認識として、情報をどのような順序でつたえると受け取りやすくなるのか、そこにも様々な工夫ができそうです。



視覚言語と音声言語では、その言語の流れや空間の活用、情報の整理がそれぞれに異なり、その届く順番も異なっています。視覚言語での情報の整理と音声言語での情報の流れ、変換するとき、まるでグラフィックレコーディングを宙に置いていくような情報の整理が必要となったり、視覚言語を音声言語にしていくなかに順序の入れ替えや起承転結が重要だったりもします。それぞれの言語と認知プロセス、そのどちらもそれぞれに魅力とわかりやすさがあります。

つたえあいのゴール

つたえることには目的や意図、ゴールが存在します。打ち合せをよりよく次へとつなげたい、あの人への好意をつたえたいなど目的達成の方向が明らかなとき、ズレたとしても軌道修正をしながら目的に向かうことができます。互いに向かいたいゴールが異なっている場合は、それぞれに語らうことで新しいゴールに辿り着くこともあります。時間や場を取り戻すことはできませんが、向かいたいゴールを想像したり、共有することから、建設的な会話がうまれるかもしれません。

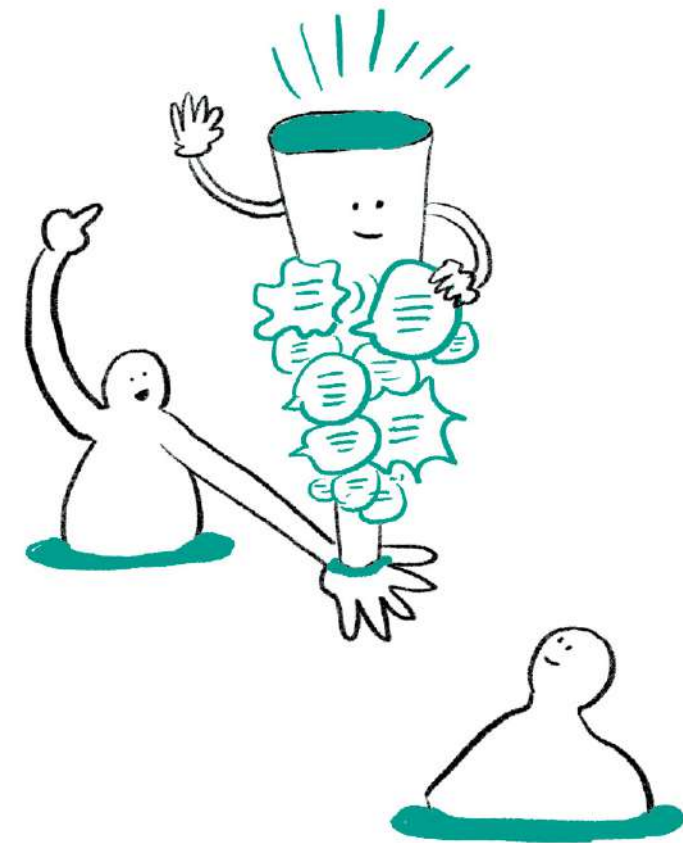


MINI INTERPRETER
PERCEPTION

手話通訳者へのヒアリングの中でよく出てきたテーマに「ゴールの達成」がありました。病院に行くときに聞きたかったことは聞けただろうか、意図をつたえられただろうか。そのゴールに対していかに柔軟に対応できるか、が大切だという声が寄せられました。柔軟にそのコミュニケーションの場について考えながら、目的の達成や納得感、相手との相互に創発する実感を得るにはどうしたらいいのか。タイミングや空気、なんとなく形成されて行くものに乗るだけでなく、その場を活用して目的に至る。そのための意識の振り方や場のつくり方、事前準備を考えることができたと思います。

つたえる芯の部分

つたえたいことを一番シンプルに表すとしたら、あなたはどんな言葉や表現を選びますか？つたえることの周りには、常に様々な情報やエピソード、会話や語りがありますが、それらをできるかぎり削ぎ落としていくとしたら、どんな表現になるでしょう？それは零せないつたえたいことの芯^{こぼ}の部分。ひとつに絞ることは難しいかもしれませんが、芯を共有できると会話がシンプルでスムーズになります。



MINI INTERPRETER
PERCEPTION

なぜ、今この人はこの話をしているのか、その話の核心はどこなのかを掴むことで、通訳をするときの軸を掴むことができます。芯を掴むと話が行ったり来たりしたとしても、話の流れを整理することができます。そこから、その人の表現やストーリーと接続し、迷わず・誤訳を減らして通訳することができます。それぞれの意図や芯の部分をはっきりとつたえあうことで、会話に安心がうまれます。つたえあうことの醍醐味は、相手の想いを受け取りともにつたえあいから創発をうみだすこと。そのためには、このお互いの大事な芯の部分をつかむことが大切なのだと思います。



視覚身体言語と
音声書記言語を行き来する



廣川麻子 ひろかわ・あさこ 1994年日本ろう者劇団入団。2009-2010年に英国で研修し、日本でも観劇サポートを広めたいと「みんなで一緒に舞台を楽しもう」を合言葉に2012年に観劇支援団体シアター・アクセシビリティ・ネットワークを設立。2018年より東京大学先端科学技術研究センター当事者研究分野ユーザーリサーチャーとして舞台芸術を中心とした情報保障を社会実装しながら研究中。

佐沢静枝 さざわ・しずえ 北海道釧路生まれ。日本ろう者劇団に入団し、舞台や映画、NHK「みんなの手話」のアシスタントなどに出演。退団後、特定非営利活動法人しゅわえもんを設立し、手話による絵本読み聞かせ普及のために仲間と奮闘中。現在は、立教大学日本手話兼任講師、ろう学校非常勤講師、TA-net舞台手話通訳養成講師、「手話で楽しむみんなのテレビ」などに出演、手話監修に携わる。

南雲麻衣 なぐも・まい 3歳半で失聴、7歳で人工内耳埋め込み手術を受ける。文化施設の運営とアートなどの企画の仕事の傍ら、パフォーマー、アーティストとしても活動する。近年は、当事者自身が持つ身体感覚(ろう[聾]する身体など)を「媒体」に、各分野のアーティストと共に作品を生み出している。



左から、佐沢静枝、廣川麻子、南雲麻衣

「視覚身体言語と音声書記言語を行き来する」と題して、舞台や芸術分野を開拓されているNPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク TA-net 理事長の廣川麻子さん、NPO法人しゅわえもんで手話による絵本の読み聞かせアドバイザー、手話講師や役者として活動している佐沢静枝さん、パフォーマー／アーティストの南雲麻衣さんにご参加いただき、視覚身体言語と音声書記言語の違いや特性を語り合う座談会を行いました。それぞれの言葉の持ち方や身体との馴染み方、つたえる方法について、聞き手にアーツカウンシル 東京プログラムオフィサーの嘉原妙さん、和田夏実、そして、グラフィックレコーディングに清水淳子さんをお迎えし、その場で描きながら伺っていました。

自分にとってのしっくりくる言語とは？

南雲 わたしの場合は2つの言語を持ち合わせています。3歳のときに聞こえなくなり、人工内耳の手術を7歳のときにして、当時は音声言語が主でした。手話は、18歳のときにろうに会って習得し始めました。今は、それぞれ半分ぐらい使っているような感覚です。

自分の中で使いやすい言語は、その時々を使い分けているイメージ。一人ひとりにつたえるための内容自体はやっぱり違うんですね。たとえば、アート領域の場合、アートを専門とする人との会話では、言葉の選び方が近い方が多いのでつたわりやすかったりするけれど、全く専門が違う方とはつたわらない。それぞれつたえたい形、考え方に近い形にあわせて言葉を扱っているような気がします。

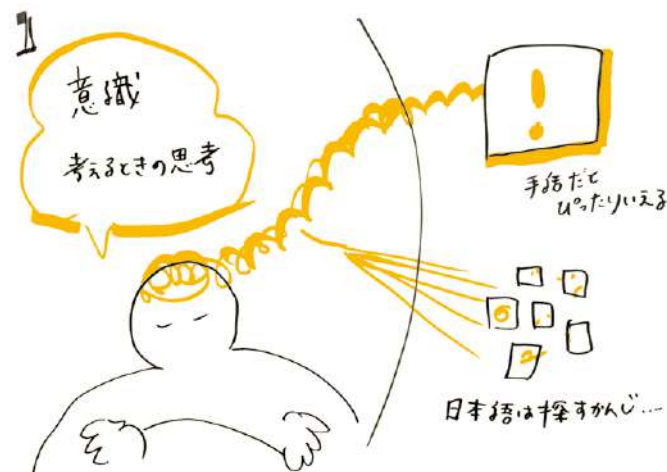
また、手話の場合には、まず優先したいことを最初につたえるという構造があります。聴者の会話、日本語の場合は、遠回しにつたえる感じがするので、正直手話の方が建設的な話をしたいときに向いていると思います。手話だと、パパパッと視覚的・構造的に話がまとまり打ち合わせがスムーズに行える。手話と音声言語だと時間の流れ方が違うなというふうに思いますが、いかがでしょうか？

佐沢 そうですね、日本手話の方がまずいいことをつたえるという構造があって。手話で考えていることを日本語に翻訳する作業をしている気がしますが、わたしの中ではやっぱりまどろっこしさがあります。通訳者の中でも英語が得意な通訳者の方がストレートで、言語感覚の近さを感じることもあります。

廣川 わたしは手話を身に付けたのが大学に入ってからと遅く、少しずつ手話を覚えていきました。それまでは筆談や口話で会話し、その後、手話を学んでいく過程で、手話の方が気持ちを表しやすいなと思う面が増えてきたんです。文章を書くときに、本当に自分の気持ちを表すことが難しいっていつかあるんですね。いい言葉はあるはずなんだけれども適切な語彙が見つからない。ちょっと違うな、この言葉は近いかなと探しながら、これだ

と思える言葉を見つけていくという感覚があります。

聴者の場合は、耳から語彙が自然と増えていくと思うんですけども、ろう者の場合は、耳から入ってこないで本やニュースなどの文章を読んで自分の中に語彙を蓄えなければならない、というのがある。最近、わたしは読書が昔に比べてすごく減ってきたなあという気がして。以前はテレビに字幕がついていなかったのかわからなかったんですが、最近では、SNS動画やテ



レビ、いろいろなものに字幕情報がついてきています。その分、読書の量が減って日本語の語彙が減ってきた気がします。今の自分にとっては手話の方が自分に合う言葉のような気がしています。

佐沢 わたしの場合は、姉がふたりともろう者で、こどもの頃はテレビをみても字幕がない時代だったので、情報源は姉たちの会話が基本になっていました。姉妹3人のおしゃべりがすごく多かったと思います。なので自分にとっては、手話の方がいいということがいえる。最近では昔に比べて本を読む量が増えたので、この手話の表現を言語化し、手話からいかに翻訳するか、ということに興味を持つようになって、手話ならではの表現や魅力的な表現とマッチした日本語に翻訳するには、どういうのがあるかなと探している感じがします。

ただ、アートに関するイベントのときは、すごく抽象的な言葉が多いですね。手話通訳がついても何をいいのかなあって思うときに字幕をみるんです。字幕をみてもやっぱりわからないっていつかもあるんだけど……。その辺の抽象的な言葉を通訳することは、特に難しいなって思います。

廣川 専門的な用語はすごく難しいですね。おしゃべりみたいに、自由に喋っているときは、手話の方が相性がいいけれど、専門的な用語に関しては字幕の方が納得感がある。その違いは何なんだろう。

意識の中の言葉、頭の中での言語について

南雲 廣川さんの話の通り、語彙っていうのは自分の中に蓄積が必要ですよ。音声言語(日本語)の場合、その蓄積していく言葉を探しているとき、自分の中の一番いいことを探すときに、何とか湧水を探すとか、水脈をたどって水源を探していくみたいな気持ちがあるんです。何もないところから自分の気持ちにぴたっと合う言葉を探して、探して、いや違う、これもなんか違うというのを繰り返しながら、言葉の水源を、あ! みつけた! っていうような感覚に近い。

手話の場合はなんだろう。わたしは全部が水っていう感覚かな。気持ちがある体に馴染むからか、探す必要がなくて感じたままにそのまま手が出てくる。そのまま気持ちの感情が手に乗っかっていき、それをそのまま表すことができる感覚が手話にはあるんです。

佐沢・廣川 すごくよくわかります。

佐沢 日本語の場合、自分の気持ちにぴたりかどうかをすごく探してしまう。それは、第一言語が手話だからなのか、それともそもそも手話の方が、聴者やろう者関係なく、自分の意識や感覚に近く、絵みたいに表しやすい、というのがあるのかもしれない。

南雲 手話の方がイメージをそのまま表現することができますよね。

佐沢 たとえば、森とかきれいなものをみて言語化するとき、どんな色があったのか、風の動きとかイメージにある言葉を日本語で探さなきゃいけないけれども、手話の場合はそのみたま、感じたままの通りに表現することができる。それに、表現も一人ひとりそれぞれなんです。揺れている様子とか鳥が飛んでいく様子を、イメージのままに表すことができる。その映像的に表すことができるところが、表現の幅が広い感じがするんですね。聴者も手話を学んだら、もしかしたらそういった表現の幅が広がるのかなあって思ったりもします。

記憶の中の体験、イメージを出すときの表現、言語について

廣川 さっき、佐沢さんがご自身の家族の話をしたとき、そのときの感情が表現されていたと感じました。ふたりのお姉さんと話している様子は事実の説明なんですけど、加えて、佐沢さんが小さいときの気持ちに乗っかっている感



じがありました。嬉しい、楽しいという気持ちが垣間みえたというか。佐沢さんの副詞的な顔の表現があり、その気持ちの機微、記憶の中のあのときの感情をみることができるんですね。佐沢さんの体を通った記憶の体験がこちらにもつたわってくる。手に乗っかる感情や記憶というのかな。

南雲 今の話の、佐沢さんの手の周りにあるモヤモヤとした何かがあって。説明できないけど……というその説明できないけれど、確かにその手の周りにこう感情や記憶が乗っかっている感覚があるんですね。こういうことが共有できるのがまた、手話の面白さですね。この手に乗っかる感情みたいなものって、グラフィックレコーディング(以下、グラレコ) だったら説明できるかもしれないですね。

佐沢さんの記憶を改めてみんなで見ているような感覚ですよね。それってすごく面白いなって思います。

佐沢 記憶を引き出して説明するときは、日本語じゃないんですね。この動き、間の顔とか表情とかまでみえて表しているの、たとえば、名前を伏せてある人の話をしていたときに、手話だとその人の表情を映して表せてしまうから、誰かわかっちゃうときがたまにあったりするんですね。話し方とかも映しちゃうから、バレちゃったということがある。手話表現は、その中に映像がたくさん蓄積されていて、でも、誰かに日本語でつたえるときには、その映像を言語化すると思うんですけど、日本語で表すとどうにもその映像が小さくなっちゃう気がするんです。情報量が少なくなるというか。

南雲 詩的な文章を書く人もいて、頭の中の映像とかイメージをうまくつたえることができる人もいますよね。

佐沢 知人のろう者の女性に、すごく映像的な文章を書く人がいます。彼女は、自分の経験を文章化していくときに文学的に書いていくんですね。聞くと彼女はいつも友達としゃべるよりも、ひとりで本を読むのが好きで文学関係の本を読むのが好きだから、自分の中に映像とあわせて日本語の蓄積もすごくあるんじゃないかといっていました。それは、彼女のセンスだと思うんですけど、読むとああ、すごくわかるって思うんです。こういう風になりたいって思ったりします。

専門領域の言葉、その世界だけの言葉たち、 どんな選択をしていますか？

佐沢 専門用語を使うとき、手話だけだとその用語の意味がわからないと、その言葉を掴むことができませんよね。たとえば、大学の先生の話のときなど。そういうときは、日本語として予備知識があるのとないのでは違う。わたしの経験なんです、言語学の講義を受講していたとき、音韻論、意味論、統語論みたいなのがあったんですね。そのとき、ろうの講師が、それぞれの意味を手話で説明してくれて、ぐっと理解が進んだという経験がありました。専門用語を使う場合は、日本語を手話で噛み砕いてつたえていけると、より具体的にその言葉のイメージを掴めるのではないかなと思います。アート関係の手話の仕事をしたとき、抽象的で手話で表すのがすごく難しいと感じました。どうやって南雲さんは仕事をしているんですか？

南雲 今、アートの世界にはろう者が非常に少ないんですね。手話での語彙っていうのがまだできていない状



態だと思う。たとえば「拓く」という言葉があるんですけど、「ひらく」というふうに読むときがあるんです。イメージとしては、新しい手法を発明・発見する意味合いで使うときにそう読む感じがします。手話では、これは「両手で開発する」と表すのか、と先ほど通訳のチームと話しました。「拓」をそのままの日本語の漢字の意味での表現をすると誤解を招くかもしれないので、新しい表現をつくらなければならないけれども、そういうのがまだ足りていないと思うんです。

佐沢 新しい方法の発明・発見っていうのは、「パッと思いつく」「ひらめく」という手話表現が、「拓く」に合ってるのかもしれないね。

廣川 結局、聴者も「拓く」という言葉に対するイメージは人それぞれですよ。アートに詳しい人は「新しい手法を発明・発見する」というイメージを「拓く」という言葉から感じるかもしれない。それぞれの問題なんじゃないでしょうか。

佐沢 「拓く」っていうイメージは南雲さんにとってどんなイメージですか？

南雲 今はまだ何もないところから芽が出るというよりは、開発していくってようなイメージが近いです。または、何というか「耕す」という言葉のイメージに違いかもしれません。

廣川 「耕す」という言葉を聞くと、ゴロゴロした岩のまわりで鍬を持って土を掘り起こしている、まずは挑戦してみるみたいなイメージを持ちました。

南雲 具体的な畑とかのイメージというよりは、もう少し抽象的なイメージなんですよ。

佐沢 わたしが思ったのは「耕す」「拓く」というイメージは、真っ白なところに何か描こうとするイメージ。何もなくなって、今思いついたものをつくっていく、ものがどんどん広がっていくといった、ポンポンポンンッと広がっていくっていうのがイメージに近いのかなって思ったんですけど。

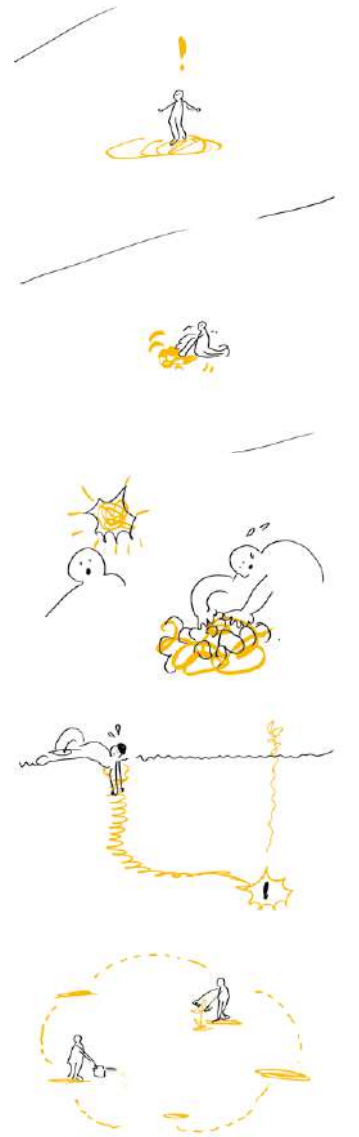
南雲 まだ新しく何もないところに自分がいて、そこから表していくこと。つくるっていうところから始まる、最初は耕し、開拓するという感じなのかもしれません。

佐沢 「耕す」っていう手話をする、もう土がみえてしまいますね。なんていうか思いついていく、開いていくっていうばんとつながっていく感じが近いんじゃないでしょうか。

嘉原 アートプロジェクトの中でもよく「耕す」という言葉を使います。それは一見何もないようにみえるところに実はいろんな可能性が埋まっていて、そこをゆっくり耕して行って、種を植えたり芽吹く環境を育むというようなイメージで使っています。いろんな人の表現する力が、うまれるように耕していくってようなイメージがあるから、よく使われているのかもしれない。耕すのイメージには拓くっていうのもあるし、関係性をつないでいくってようなイメージもありますよね。

佐沢 その場合はひらめくというだけではなくて、時間をかけて豊かになっていく、つながってくるっていうイメージですよ。ああ、だから、なんていうか、こうパッと思いついて終わってなる手話表現だと足りない感じなんですね。

南雲 生き物がうまれて、また別のものがうまれて、そこから世界がつくられていくってようなイメージかもしれません。



佐沢 耕す先にはまだ何もみえない。でも、そこにはきっと何かあるだろうと、何かあるかわからないからこそ、まずは掘ってみて拓いてみようという感じなんですね。

廣川 芽吹いても折れちゃうかもしれないし、だから、種を埋めてどんどん芽吹いていく環境をつくる。折れても別の場所で花開くかもしれないというような、関係性が広がっていくみたいなイメージがあるかもしれませんね。

こういうイメージを今みたいに話すことで、言葉が広がっていく感覚があります。手話表現での「耕す」が他の表現であるのかを手触りで探していくことで、その言葉の意味を掴み取る新しい手話表現がうまれるのかもしれない。

気持ちによってぐわっと掴み取る、と思う人もいれば、少しずつ探りながら近づいていく人もいるかもしれない。「耕す」というときに、ここに熱があるんだとか。言葉にすごく命を吹き込んでいくような強さが現れるときもあるかもしれませんし、ぎゅっと言葉の意味がうまれてくるというのは面白いですね。

新しくうまれる言葉たち

和田 まだ何とも形容が難しいこと、モヤモヤしたところからうまれる言葉、新しい言葉が出てきたときに、その言葉に対してどうやって手話の世界ではアプローチしているのですか？新しい感覚、概念に対してどういう風に日本語で書いて手話で表しているのか、それぞれの違いについて考え教えてください。

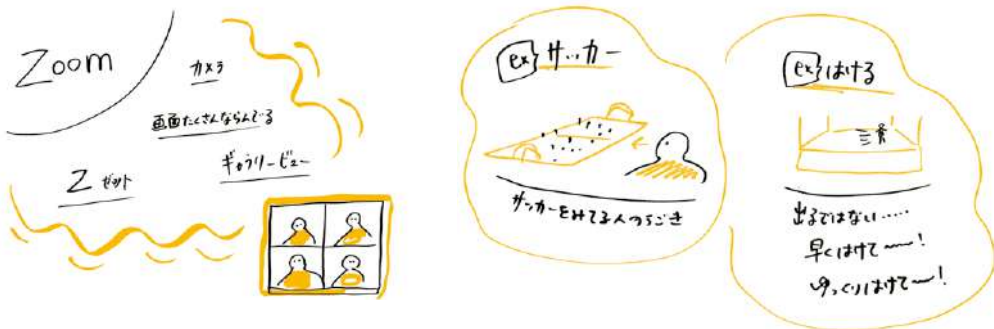
佐沢 手話の語彙が立ち上がっていくルールをみていると、基本はやはり形からつくることが多いように思います。動き、形をそのまま表すことが多い。それが自然にろう者の世界で広がっていく感じがあるんです。逆に言葉から指文字をつけてつくったものもあるんですが、それはなかなか浸透しない。CL*というか、形から自然に現れてくるものかなって思うんです。

たとえば、Zoomの表現がろう者の間で2020年流行りました。Zoomの表現は、みなさんそれぞれ最初は指文字だったり「ズ」の手を入れたり、カメラを表す人、アイコンの表現からつくることなどいろいろありました。だんだんとZoomに慣れていく過程で、みんなの顔がみえるギャラリービューのイメージに近くなっていたので、自然と広がったのが画面がいっぱい並んでいるようなイメージの手話表現なんです(片手で画面の1つを表してZの線状にあらわす)。Zの意味もあるんですけど、ポポポポって顔が並んでいるイメージもあります。

嘉原 手話がうまれるときに視覚を参考にする話がありましたが、わたしたちの動作からつくられることも多いんでしょうか？

佐沢 動作でいうと、たとえばスポーツの場合は、バスケットや野球は動作ですしバレーも動きで表します。サッカーも動きを指で表したり、陸上はトラックを俯瞰でみているようなイメージで表しますね。

廣川 演劇の「はける」。たとえば人差し指で人の動きを表すことで、「ゆっくりはける」は、指をゆっくり動かすなど、イメージを共有できますね。



*CL(classifier=類別詞の略)

CLとは、物の形や性質、大きさや動きなどを手で表したものだ。日本語の類別詞に見られる細長いもの、例えば鉛筆などは「～本」と数え、紙のような薄いものは「～枚」と数えるといった分類の仕方に共通性がある。参考：『手話を言語と言うのなら』(森 壮也 佐々木 倫子編、ひつじ書房) 13ページ。

和田 動きとか関係性をつたえることができるのも手話の特徴で、ダンスや舞台に非常に相性がいいなと思います。言葉だともう少し早くとかももっともっととか、グラデーションをつたえることがなかなか難しい。そのスピードをそのままに表すことができないなどそのあたりも面白いなって思います。

佐沢 廣川さんと一緒ですが、ろう演出家の舞台で、間や空間の説明は手話だったからか、すぐに理解しやすかった。つまり、ぐっと進んでパッという風な映像的な表現をすることによって理解できたんです。でも今の手話表現を日本語で表すとどう翻訳するか悩ましい。

南雲 さあーとか、すーみたいな言い方、擬音語、擬態語になるんじゃないかしら。

言葉の広がりと想像の可能性

廣川 逆に手話で難しいのは、相手に考える余地を残しながらつたえるということ。たとえば、舞台に椅子がひとつだけあって、演出家が演者に「座ってください」とつたえるとしますよね。演出家としては、どう座るかは演者に考えてほしいと思っている。でも、手話でシンプルな「座る(人差し指と中指で腰掛ける動きをつくる)」と表すと「椅子に座ってください」とつたえていることになる。演者は、どう座るのかの動きがみえてしまうことで「座る」表現が狭まる可能性があるかもしれない。それに比べて、日本語の「座る」という言葉からは、どういう座り方なのか想像する余地がある。台本に「座る」と書いてあるのに対して、演者は自分で考えなければならないというときがありますよね。その表現を考える・想像するとき可能性を狭めないでつたえていけるのかという難しさを感じています。

南雲 手話の場合は、その手話で表されたそのままの在り方で座ってしまうから、想像の余地が広がらないということですね。

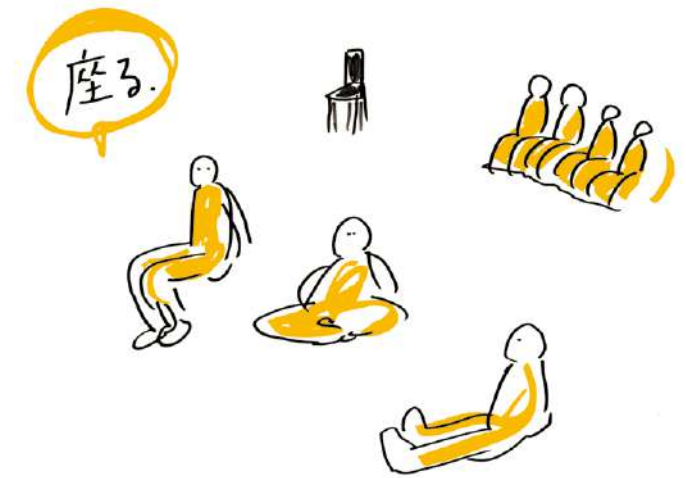
佐沢 手話通訳の問題もあるでしょうね。通訳が椅子に座る表現をしてしまったらその椅子に座ってしまう。たとえば、日本語の「座る」を想像してやってみてくださいなど、通訳のニュアンスを考えなきゃいけないのかもしれない。「座る」の言葉の周りにどう表しますかを濁す表現をする必要があるのかも。単語から自由に表現していいんだよとつたえないとわからないですね。

南雲 だから言葉ってずるって思います。

和田 たとえば、こどもと一緒になぞなぞをやっているときがすごい難しいんです。想像のジャンプを音声言語での単語の言葉は得意とするけれど、手話で表すのは難しい。

佐沢 すごくよくわかります。たとえば手話でなぞなぞをしようと思うと答えになってしまうことがあるんです。なので仕方なく指文字で表す。または書いてバレないような表現をつくらなければならない。

たとえば、『だるまちゃんとてんぐちゃん』という有名な絵本がありますよね。あの絵本の中で、てんぐちゃんの「はな」が欲しいとつたえ



て、お父さんがはな(花)を買ってしまうというシーンがあるんですが、違う違う、「はな、はな、天狗のはな(鼻)だよ」と最後にやっとつたわるというのがあります。でもこのシーンを手話で表すと、もう天狗の鼻になっちゃう。お父さんが間違えようがないんです。でも、絵本の中では間違える必要があるの、指文字で表すという調整をすることがあります。

つたえるを発明することの可能性について

南雲 とある作家さんに、話していることを、いったり戻したりする方がいます。その方と2人で会ったときに試しに筆談をしてみたんです。彼とは筆談はすごく相性が良くて、書いて残すことができるので、いったことをまた戻りたいときや探したいときに、これとこれとこれがつながって.....みたいな会話ができてすごく良かった。彼との会話は、言葉での会話だけだったら、わからなくなって迷子になってしまったんじゃないかなと思います。

別の演出家の方とは、ずっと一緒にいるときになんとなく感覚や意図を掴むということがあります。わからないときはわからない、とつたえる。そうするとその人の説明の仕方がだんだん少しずつ身振り手振りっていうのが増えてきたりして、わたしに向かってつたえようとする動きや視線から発する表現の体つき、体の厚みがその人自身から出てきたような気がします。

和田 声ってしゃべったら勝手に届くというか、相手に侵食することができる表現だけど、手話はみる、すなわちみることかを選ぶことができる言語だから、つたえ手は「みて」というエネルギーを発することで立体的な表現になってくることが多い気がします。身体を使って空間に表すというのがありますが、パフォーマンスやアーティスト、つたえる・表すという体をみていると、発する熱量やその動き、身体自体に厚みがあるなって思う。それと似たような形でみせて

つたえるという発する力を、手話の方が持ちやすいのかもしれない。

南雲 語彙の量よりも、つたえるという熱量がちゃんとあるかないかで、こちらにつたわってくる感覚が違うという感じがありますね。



手話通訳との関係性

佐沢 南雲さんは自身の制作のときに手話通訳は必要ですか？

南雲 わたしは自分がダンサーとして出るので、直接対話できる方がいいんです。通訳を介すと、どうしても受け取る情報が減ってしまうような感じがして、演出家にがんばって向かおうとする感覚が必要かなと思います。

佐沢 聴者の演出家からのレッスンを受けたときに、毎回、通訳者が変わるとすごく苦しいです。通訳者によっては、演出家がいったことをちゃんとグッと掴んでわかりやすくつたえることができる人もあれば、演出家がわかりにくいからつたえられていないのか、通訳者のつたえ方の問題でわかりにくいのかっていうところの判断ができないときがある。そういったときは、せっかく通訳もつけてもらっていてありがたいけど.....でも、わからないなあと思うときがあります。

廣川 モノをつくる現場では、つたえる相手と直接やりとりしながらつくるのがベストだなと思いました。お互い

につたえ合う、わかり合う、意図を受け取ろうとする努力が必要。体を使ったつたえ方をつくったりする方法を互いに発明していくことが必要ですね。

嘉原 通訳を介すとリズムがワンテンポずずれていくという感覚は確かにあると思いつつ、わたしは2020年から手話の世界にふれてきている中で、直接チャットでやり取りするときもあれば通訳者を介して待つ時間にふれることもあるのですが、その待つ時間がわたしはなんか良いなと。自分のリズムと

は異なる相手が何をつたえようとしているのか考えながら待つ、相手もわたしのつたえたいことを想像しながらまた待つ、そうしながら一緒に待つ、つたえ合う時間を共有していくというか。互いの関係性を馴染ませていくような方法と、自分でダイレクトにつたえていくことの2つの手法を持てるとコミュニケーションがより豊かになっていくのかなと思います。

佐沢 ダイレクトにつたえ合いたいこともあれば、もっと深く何をどういうふうと考えていたのかは、その人の言語を通してこそみえてくることもあるので、通訳者とこのつたえ手の方をシンクロさせていくと、もっともつたわってくる。温度を受け取っていくってということが非常に重要だなって思います。

嘉原 わたしはコーディネートやマネジメントという場をつくる仕事をしているので、今日、みなさんのお話を聞きながら、どういう風に事前の準備を行い、通訳者と情報共有をしなきゃいけないのかという気づきがありました。また同時に、通訳者と伝え手の情報共有や呼吸の合わせ方みたいなことも考えなきゃいけないと思います。手話通訳者とは、直前に初めましてという状態が多く、この初めましての状況どうやって設計していくか。わたしはこういう思考や感覚を持つ身体ですということをもう少し渡せる何か方法があるといいのかなって思いました。それが単なる普通の打ち合わせじゃなくて、その人らしさがちゃんと共有できるみたいな、つたわる方法、メッセージがあるといいなといろいろと想像しました。

廣川 わたしたちはやっぱり通訳者を介して仕事をする人が多いので、いきなり「はい、ではお願いします」ということではなくて、その人の温度を共有する方法や、どんなふうにつたえたいかという意図を事前につたえていかなければならない。みんなで共有・温度、場をあたためることから始めていかなきゃいけないのかなと思います。

佐沢 聴者でもろう者でもその通じ合いの時間をどうやってつくれるのかを考えていけるといいなと思いました。

気持ちがわかる通訳者。

前もって事前に会う

温度感をみている。



それぞれの言語の中で コミュニケーションを発明する



佐藤 涼太郎 さとう・りょうたろう 本名を略して「さとり」という名前で活動している。北海道の東部に生まれ、高校まで北海道のろう学校に通ったのち茨城にある筑波技術大学に進学。現在は東京に移住して接客業を本業にする傍ら、Twitterで「さとりしゅわにつき」などの手話動画配信、ろう者と聴者が歩み寄る場作りであるろうちょ〜会運営を行っている。小さい頃から数多の本を読み漁り、インターネットの掲示板等に触れて日本語を学ぶ。そして日本語対応手話で育ち、高校から日本手話を学ぶ。現在も日本語と日本手話を日々勉強中。

日常の中での様々なコミュニケーションに対して、わたしたちは一体どんなふうに向き合っているのでしょうか。座談会「視覚身体言語と音声書記言語を行き来する」を経て、より日常の中で、様々なメディアツールの進化とともにその行き来はどう変化しつつあるのか考えてみたいと思います。手話古文や「さとり日記」の配信、ろうちょ〜会など様々なメディアやツールを用いながら、しなやかに手話の魅力を発信されている佐藤涼太郎さんに、オンラインインタビューにて視覚身体言語と音声書記言語の違いや特性、そこから連なる日々のコミュニケーションについて伺いました。

—— 手話で受け取ることと文字で受け取ることの違いは何だと思えますか？

手話の方が早いという感覚はあります。時間の流れの違いがあるので、手話の方がストレートに早くつたわる。日本語の場合は丁寧語や謙譲語や尊敬語、文字の羅列で意味を丁寧につたえるのが少し大変な気がします。たとえば、お店で店員さんにこの服ありますか？と聞きたいとき、筆談で書いて説明するのは大変ですが、手話だったらある？ない？を直接やりとりする感覚ですぐにつたえあえるというのはあるかもしれません。

—— 直接対話ができるという感覚になるコミュニケーションには、どういう方法がありますか？

わたしの場合はチャットでのコミュニケーションです。たとえば誰かとつたえあうとき、通訳を介すと待つことになったり、変換作業が起こるので、自分で打つチャットの方が自分の考えたことをそのままつたえることができると思います。

—— 古文を手話に翻訳をされていましたが、その中での気づきについて教えてください。

古文が好きだったので表してみたらどうかと、ためにに古典を手話で表してみました。日本語の中でも短歌や詩

には言葉の余白がありますよね。でも、手話で翻訳するとその余白がなくなっちゃうなっていうふうに思ったんです。わたしが手話で表現してしまうと、古文の言葉が持っていた余白部分を手話の動きで映像的に埋めていく感覚があって、それがすごく難しいなと思いました。

—— 考えているとき、手話と日本語のどちらで考えている方が多いですか？

そして、そのとき、頭の中はどのようなになっているのでしょうか？

手話の方が多いような気がします。手話で考えているときは、先に体が動くような気がします。たとえば動画の撮影をするとき、頭の中にあるイメージを手や身体、表情で追いかけていって、身体が先に表現を始める。終わった後、映像を編集するときに日本語の訳を考えます。手話で考えているときのイメージは、パソコンのフォルダが3つ階層としてある感覚。これとこれとこれ、というのが分かれている感覚があって、それを組み立てながら表している。記憶や映像、印象的なシーンとか体験を表す場合は手話の方が合わせやすいような気がします。自分の体の感覚に合う、そういう感じがあります。

—— 身体が思考・記憶を追いかけていくときの感覚について、もう少しお話を伺わせてください。

記憶の場合は、自分の視点からの初体験なので、自分の目から見える景色のイメージになるけれど、それを表そうとするときは、その景色を俯瞰でみてるような感覚があります。たとえば、「車で事故った」を手話で表すとき、自分の体験自体は一人称なのに俯瞰の映像として、車の動きやぶつかり方を上からみているような形で表すことになります。他のろう者と手話で話しているときも、俯瞰での表現になり、1対1で内容を表すときは、ロールシフト(注釈：手話の文法)に変換されて、その人たちの中で再構築された表現になります。映像をそのままに、といいつつ、変換作業はあると思います。日本語の場合は、前から車が来た、というように一人称視点での語が多いと思うんですけど、手話の場合は三人称になったり、俯瞰になったりするイメージがありますね。

—— 手話通訳を介するとき、リズムやスピード、タイミング、コミュニケーションのずれをどう揃えてますか？

一方的なコミュニケーションの場合は手話通訳の方がいいと思うんですが、大人数での双方向の場合はリズムやタイミング、話者が誰なのかが手話通訳だと受け取りにくい感覚があります。大人数での場合は、特にそれぞれに思いつくタイミングや考える時間が違ったりしますよね。また、声が重なるときもあってそれは通訳ができないですね。

たとえば付箋などを使って、自分のぱっと思いついたことを示すとか、チャットは残るので、みんなの言葉が追いかけられるので良いです。でも対面の場合は会話が残らないので、あとで振り返ったり追いつくことができない。そういう意味で付箋やチャットは誰かの意見がなかったことにならない。いつでもそこに、意見を投げる自由があるように思います。

—— 日本語の魅力と手話の魅力とは何でしょうか？

わたしの場合は日本語の方が余白の調整がある感じがしていて、どこまでを言葉にして、どこまでは言葉にしないか、その量の調整は日本語の魅力だと思います。それぞれの表現に日本語由来、手話由来の良さがありますよね。同時に、日本語であれ手話であれ、この人とはこうつたえあいたいから、こんなふうにつたえるといったように、その時々により良い方法を選べる情報整理やインフラにはどんな可能性があるのか、つくっていくこともまた大切なのだと思います。



言語と思考のあいだでゆらぶ



瀬戸口裕子 せとぐち・ゆうこ 手話通訳士 耳の聞こえない方々の生活に関わる手話通訳を担う傍ら、個人的な活動として耳の聞こえない方と一緒に巡る美術館の作品鑑賞を8年間続けてきた。その後、東京都美術館のとびらプロジェクト「とびラー」になり、ワークショップ「ボッティチェリ・鑑賞・香り〜聞こえない方と聞こえる方のサイレントコミュニケーション」や、「アート筆談deコミュニケーション」などのとびらボを実施した。その経験を活かし「TURNプロジェクト」や東京都写真美術館などアートの現場での手話通訳を担うようになる。また、NPO法人シアター・アクセシビリティネットワークの会員としてイギリスの演劇における舞台手話通訳の視察研修に参加し、演劇関係のアクセシビリティについても研究中。



清水淳子 しみず・じゅんこ デザインリサーチャー/グラフィックレコーダー 1986生まれ。2009年多摩美術大学情報デザイン学科卒業後 デザイナーに。2013年Tokyo Graphic Recorderとして活動開始。2019年、東京藝術大学デザイン科修士課程修了。現在、多摩美術大学情報デザイン学科専任講師として、多様な人々が集まる場で既存の境界線を再定義できる状態 “Reborder”を研究中。

アートプロジェクトの現場は、日々様々なコミュニケーションがうまれていき、それは同時に間に立つ方々とのつたえあいの手法の開発や創造性がうまれる瞬間でもあります。この「言語と思考のあいだでゆれる」瞬間に日々立ち合い、TURNをはじめとする様々なアートプロジェクトの現場で手話通訳を実践されている瀬戸口裕子さんに言語と思考、メディアや表現の異なるあいだで伝えるときのコツや身体感覚について、グラフィックレコーディングの清水淳子さんと和田夏実でインタビューを行いました。いつしかインタビューは、清水さん、和田もそれぞれの実感や例をもとに、メディアの異なる表出を行き来する3者の対話の場となりました。

音声言語→視覚身体言語におけるコツ

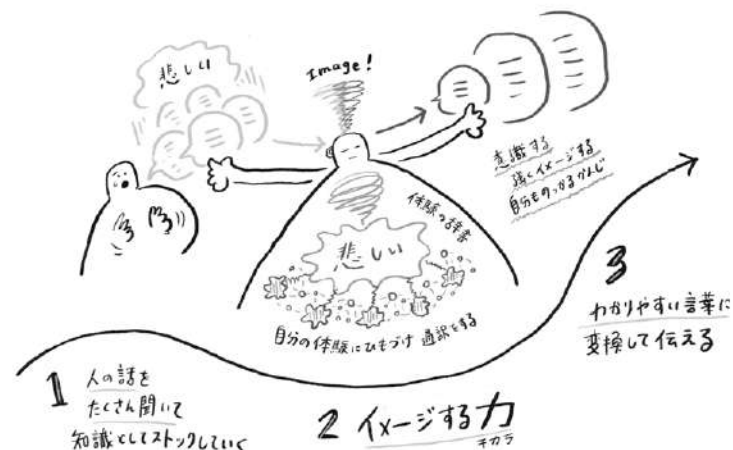
和田 音声言語から視覚身体言語（以下、手話）に変換していくときの、思考の流れを紐解いていきたいのですが、ひとつは言葉から言葉、言葉から手話単語に変換していく通訳と、言葉から映像化、イメージを浮かべて、なぞる・追いかけていくという通訳がある気がして。

まずは、瀬戸口さん自身の感覚についてお伺いさせてください。

瀬戸口 そうですね。音声言語同士の会話でも人の話を聞くとき、多分イメージすると思うんですが、さらに意識をして、強くイメージ化していくことを自分に課するという集中力を通訳のときは使ってる感じがあります。「あ、イメージができない。どうしよう、でも伝えなきゃいけない」となると、ただラベルを並べるだけになってしまって、綱渡り状態のような不安な気持ちになりますね。イメージができるかできないかというのは、その通訳の精度にすごく大きな差が出るんじゃないかな、と思います。

和田 確かに、細部までイメージすることができたときに手が追いついてくる気がします。

瀬戸口 そうですね。まず人の話をたくさん聞いて、知識としていろんなものに触れていく。それが自分にストックされることで通訳に活かせると思います。そういう日々の努力も必要で。それから、イメージする力。あとはひとつの出来事になるべくろう者にわかりやすい言葉に変換していくという、大きく分けて、この3つのステップのトレーニングが必要かなと思います。



経験の量とイメージすること

清水 イメージするところにいろんな階段が実はあるのかな、と聞きながら描いていたんですが、このイメージするときに、自分の体験に紐付けることはありますか？

たとえば、21歳と34歳のときでは、やっぱり人の苦勞を聞く感覚があがっているんじゃないかなと思うことがあって。年齢とともに自分の中での体験が増える。体験の辞書のようになっていくことでイメージの感覚があがるのではないかな、と思うのですがいかがでしょうか？

瀬戸口 それ、すごく最近感じます。手話通訳者ってすごく年齢層の幅があるんですが、確かに若い人の方が手話の覚えも早いし、新しい情報も知っていたり、聞く力、出す力、スピード力は若い人の方があると思うんです。でも、年配の手話通訳者は、やっぱり何十年って生きてきたその経験値があるので、話を聞いたときに自然に出てくる知識や経験値が格段に高い。たとえば法律ひとつとっても、相続の話でもいろんな親族の問題や家族のこと、いろいろな法律関係も実体験で経験しているのによくわかる。通訳の解像度が違うんじゃないかなと思います。

清水 この図でのワンツースリーステップをみると、ある程度誰でもできそうと思うけれど、伝え手と同じ時代を生きていて、同じような経験をしているからこそ繰り出せる翻訳があるのだなと。そして、イメージする力は、経験する



ことによって通訳者の身体知として蓄積されていくんだろうなと感じます。

和田 創作の現場も近いかもしれませんが、わたしは結構一緒にいる人と長く並走しながら通訳することが多くて、そうすると同じ映画を見るとか、同じ作品を見るとか、記憶やイメージの広がりをもっと持みたいなのも、イメージする力の中の要素に入ってくるのかなと。映画の語彙、音楽の語彙、作品鑑賞の語彙が増えていくと、通訳が追いつけるようになるように思います。

それぞれの見え方？

瀬戸口 イメージすることや自分の中の経験ってひとつの同じものを見ていても、それぞれどこを見るか、どういうイメージを持つかは人それぞれ違うと思うんですね。

あるアーティストが盲ろう者の通訳支援の講座を受けたときの話が印象的でした。通訳支援としては、盲ろう者にその見た情報を伝えていかなきゃいけない。ただ、そのアーティストは、みんなが気づかない所ばかりに目がいってしまう。すぐくレアなところを抽出するの

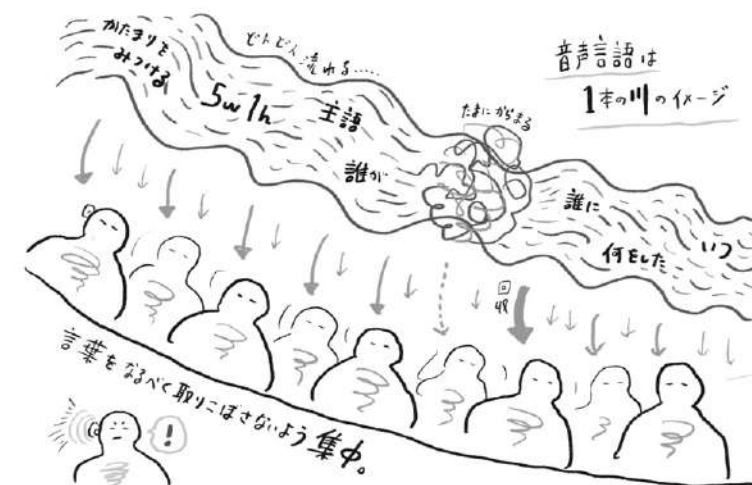
が得意で、大多数の人が感じてるイメージはあまり興味がなく、ほとんどの人が気づかないような、部分的な面白いところや、情報ばかりを伝えてしまうと。そのアーティストは、自分は通訳者には向かないかもって言ってたんです。それがすごく面白くて。まだ整理しきれてないのですが、イメージを伝えるとき、じゃあその伝える情報として一番何が通訳者として正確なのかなって。

清水 もし、絵の真ん中に苦しんでる男の人がいたとしたら、これが主役だってほしい人は思う。だけど、アーティストや表現に携わる方って違う視点を持っていて、ここには真ん中に苦しんでる男の人がいるけど、その後ろにはなんだかみずみずしいリンゴがあるな、これはいったい何？みたいなことが気になっていく。その眼差しが創作の源だったりするけど、通訳・翻訳するときには、いやそこがポイントじゃないだろう、ということですね。

それは、グラフィックレコーディングでも一緒だなと思いました。たとえば、ある人が「今日はこれです」って言ったら、その「これ」は大きなフォントのイメージがあるから、わたしも大きく描く。でも、ちょっとユニークな見方をすると、その人が発言しながら服のボタンを触っていた手を描いてしまうかもしれない。国語のテスト的には、そこは翻訳しなくていいよ、という部分かもしれませんが、大筋とは違う翻訳の在り方は、なんだか人間的であつたかくていいですね。

和田 そこは外しちゃだめだよとか、それこそ今日はこれです、と言ったのならそれを外しちゃだめだねっていうのは絶対あると思いますが、これは妄想ですけど、ある種(その通訳自体の視点を)選んでもいいのかなとは思いますが。

それはもはや通訳と呼ぶのかはわかりませんが、この人は新しい視点をもたらしてくれる方、専門的な領域を深く並走してくれる方、作家的な視点がもたらされる、そういった職能がうまれてきてますます面白いなと思います。もう作家さんの頭になれる、他者の目を借りるというのもありうるんじゃないかと。



音声言語から視覚言語の川の話

和田 わたしにとって 音声
言語は一本の川というか、ずっ
と続いていく縄や川のようなイ
メージがあって、日本語は迷っ
たりして絡まったりするんです。
その川に流れる言葉たちをい
かに拾って形にしていけるかが重
要な気がして。

瀬戸口 流れていきますよね、音声言語は。もう堰き止められない、どんどんどんどん流れていきますが、手話と日本語は構造が違うので、ある程度塊で聞いていかないと訳せないと感じます。

手話は主語が必ず必要です

が、日本語って本当に主語があまりなくて。受け取り方によっては全然違う主語になっていたり、話している本人の主語と受け止められている主語が全くずれてたりする場合もある。そこは慎重に、今誰が主語の話なのか、誰に伝えていることなのかなど、5W1Hはすぐ意識して話を聞くようにしています。

和田 手話通訳者のみなさんにインタビューしていく中で、多くの方から伺って面白かったのは、音声言語って出しっぱなし、散らかしっぱなしという要素が結構あるということ。でも、手話だと散らかしっぱなしにはできない。なんというか、回収して、形を整えて、箱庭のようにある程度きれいに積み上がった状態でみせることをしないと伝わらない。

清水 わたしもたまに、テニスみたいに感じる場合があります。グラフィックレコーディングをしているとき、どんどん流れていく情報がこう塊でボールのように見えた時点で拾って返そうとするのですが、早口な方だったりすると、あまりにもその情報が鋭くスピーディーで見落としてしまっ。それに氣を取られてしまうと次のボールが来てしまうから、即座に構えるというか。

人の言葉を絵にするとときに塊をつくって、どんどん箱庭みたいに積み上げていけることもあるんですが、やっぱりどうしても取りこぼしてしまうこともあって。だから、仕事の中でテニス選手のようにマインドを整えたりしています。

瀬戸口 集中しますよね。手話通訳者でもだいたい15分～20分で交代と決まっているので、その時間は本当に集中する。早い弾丸トークにも必死に挑んでいく。言葉をなるべく取りこぼさないようにすぐ集中しますね。



言葉の魔球

和田 ある通訳の方に伺ったときも、すごく抽象的な言葉で表現し続けてしまうと、ボールが宙に浮いた状態でやってくるみたいな感じで打ち返しきれず全部溜まっていくような感じがあると言っていました。ボールを打ったつもり

が、なんかカスったみたいなの、
もやもやとした感じで言葉が
漂い続けるというか。発言者
自身もクリアじゃない、もしくは
クリアにしたくないから抽象
的な言葉を選んでいる気持ち
は分かるけれど、通訳として、
抽象的な話はボールが浮いた
魔球のように飛んでくる怖さ
はあります。

瀬戸口 特に、アートの領域だと作品に対する想いみたいなのは一言では言い表せない。言葉を探して、近い言葉

を選んで、どうにか想いを言葉にしようとしている人が多いと思うので、こっちもひとつの手話に落とし込めない。だから、こう手話で表していいのかなという通訳者の主観も入ってしまう感覚もあって、本当に賭けのようなところがありますよね。クリアに目に見えているものだったら、手話は本当に視覚言語なので揺るぎなくこれですと言えるんですけど、目に見えないものを伝えるとき、それは本当に一番難しいですね。



視覚身体言語→音声書記言語

和田 視覚言語から音声言語にするときのイメージについて、お伺いしてもいいですか？

瀬戸口 読み取り通訳ってことですね。これもまたすごく難しいですね。映像を日本語に落とし込んでいくわけなので、それこそ単語レベルではだめで、やっぱりひとつの塊、あとは、ろう者から表情が重要だとときの表情はとにかく必死に見ます。イメージを今度は日本語にしていく。逆に言えばイメージはすぐ伝わってくるときがあって、そうなんだと掴めるのですが、なかなか日本語が出ないということがあります。

和田 もうここにそのイメージや映像が見えてるから、できればみんなも見えて欲しい。と思いながら、それを言葉にしていかなきゃいけないもどかしさがすごいですよね。

清水 表情や手の動きなどから、山ほど伝えたい想いや考えを受け取り、それを言葉にするときというのは、たとえば、文字だと一万字くらいの情報を200字くらいに圧縮するような感覚なのでしょうか？

瀬戸口 手話の特性で同時性があるんです。ひとつの物事を一発でポンと出せる。たとえば「スマホ見ながらコーヒーを飲みました」という手話は同時に表すことができますが、日本語だと一つひとつの動作を説明して長くなってしまふ。でも、ろう者だったらもう本当に短い時間でいくつもの行動を表せるので、それぞれの言語の特性によるタイムラグが生じて伝える時間の長さも変わってきます。

和田 小説の情景描写みたいなものも1ページぐらいあったりするじゃないですか。でも、実際にその景色をみようとしたら一瞬、映画にしようとしたら本当に一瞬ですね。映像のタイムラインと小説1ページを読み上げるタイムラインが、どうしても合わないという感覚にもしかしたらちょっと近いのかもしれない。

小さい頃、通訳の人ってなんでこんなにちゃんと伝えてくれないんだろう、と思っていたことがよくありました。わたし自身は手話も日本語もどちらも見えて聞こえてしまうので、今の伝達は6割ぐらいいかなと思っていたり。でも実際、自分で通訳してみるととても難しいことなんだと理解し始めて。そもそも、同じ言語で対話している人同士ですら、

100%、お互いのことを理解できるわけじゃないじゃないですか。

たとえば、講演会で登壇者が話したかったことが10だったとして、そのうちの2割ぐらいしか受け取れなかったかもしれない、というようなことが、わたしたちの日常の中でもたくさんある。それを、さらに異なる感覚器官の言語で、人（通訳）を介してコミュニケーションすることの途方もなさを感じます。もちろん、だからこそがんばりたいと思いますが。

瀬戸口 たとえば、ろう者が何かについて話をしているとき、その人が目で見た情報を見たまま、そのままの状態でお話してくれることがあります。わたしはそれを、本人の体験を追体験するように、そのまま受け取れるのですが、それをそのまま日本語にしたときに、内容によっては稚拙な話になっちゃいそうになるときがあるんです。

和田 今の瀬戸口さんの例にあっているかわかりませんが、たとえば、目の前にリンゴが置いてあって、手話でそのリンゴのことを話すとき、手の表現の微細さからは、「赤いくだものが置いてある」というよりも「瑞々しく青々としたリンゴが置いてある」ということの方が本当にいいかったことの翻訳として正しいかもしれない。修飾じゃないんですけど本当にその人がいいかったことの日本語での描写力がこちらに求められているという感じに近い気がします。

清水 単語だけで表すと断片的な情景しか表現できないということですね。たとえば、タイタニックの映画をすごくサマライズすると男、女、出会う、船沈む、みたいなっちゃうとか。情景の価値がゼロになってしまう、みたいなことでしょうか？

和田 そうです。言葉にしちゃうことの責任ですよね、きっと求められているのは。

瀬戸口 日本語力もね、本当に当たり前ですが、語彙力が必要ですよね。

矢印と関係性の位置

和田 音声ガイドに最近触れて、音声ガイドと手話通訳って似ているのかなって最初思ったんですけど全く違いますね。手話通訳は、話者の中に持っている感情や思いなどの中身を探っていく感覚に近く、音声ガイドは、見えてるものを見たままに描写していくという表現だなと。同じ情景だとしても、その人がなぜその表現をしたのかその人がどのような情景を浮かべて表現するのかという、その人の記憶の中だったイメージしているものに近づいていくことが

手話通訳だなと改めて思いました。情景を描写して伝えることが音声ガイドは強くて、手話通訳は情景の中に飛び込んでイタコになって喋るといいますか。

瀬戸口 通訳は、話者との位置関係、立ち位置が飛び込む感じがあるかもしれません。視覚身体言語ですもんね。どうしてろう者はあんなに豊かに表現できるんだろうっていつも思います。本当に真似できない。手話を学んでいるときに、最初、一生懸命単語を覚えたんですね。毎日英単語覚えるみたいに手話の単語を覚えて。でも、絶対それ



じゃダメで。なんでだろうとすごく悩んでたんですけど、映像のまま理解していくことができると、脳の中に新しいニューロンみたいなものがニョキニョキ生えてくる、そういう感覚がありました。今使っている言語の脳とは違う言語回路ができていくような、ろう者の場合はその回路がすごく強く太いんだろうなと。そこに近づくには相当な鍛錬が必要なんだろうなと思います。ろう者と毎日生

活する、暮らすとか、もうそこまでやらないとそういう言語回路にはなっていけないのかなって感じはありますね。

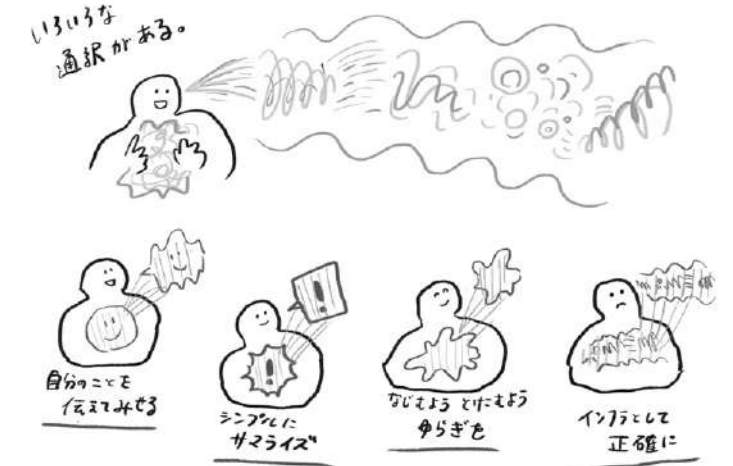
和田 昔、アメリカ手話を勉強していたときも英単語とアメリカ手話でいちいち辞書見てたら全然できなくて。日本手話しているときの回路にアメリカ手話を乗せてみるみたいな感覚でやったらすごく習得が早くなったという経験があります。視覚言語の回路には、その視覚言語のルールみたいなものがあるって、それにうまく乗せられると世界の手話も乗っかっていくんだと。音声言語の回路とは、全然違うんだと思います。



アートプロジェクトの通訳の中でゆらぐ

瀬戸口 『TURN JOURNAL WINTER 2020 -ISSUE06』（2021年1月31日発行）にもちょっと書かせてもらった「ゆらぎ」という言葉。アート関係の通訳を受けるようになってからそういう感覚が入り始めるようになりました。それまでは、社会福祉の現場での通訳ばかりをやったので、とにかく情報を正確に伝えなきゃいけないと思ってきたのですが、アートプロジェクトの通訳に入ったらプロジェクト担当者にインフラは求めてないので、もう少し自由に解放してもらえませんかみたいなことを言われたんです。

通訳ってインフラになると、逆にみんなに違和感を感じさせてしまうこともあるんだって気づいて。そこから、全体の空気に馴染むような、そこにあるゆらぎみたいなものを、その場に溶け込むっていうのかな。なんかそういう通訳をやりたいと思うようになって。今もそこを目指しながら、通訳に取り組んでいます。



東京プロジェクトスタディ1

共在する身体と思考を巡って — 東京で他者と出会うために — の実戦から

本書の発端であるTARLスタディ1は、「共在する身体と思考を巡って —東京で他者と出会うために—」と題して、コミュニケーションと身体性に関するワークショップや議論を重ねてきました。スタディの開始と同時にオンラインでのコミュニケーションからスタートすることとなった過程において、「出会うこと」や「共在すること」、参加メンバーの感覚や気づきに触れながら展開するスタディとなりました。さらに、実施時には手話通訳が入ることで、コミュニケーションのリズムやズレ、ろう者と聴者、手話通訳者とのやりとりについても考えていく場となりました。ここでは、特に第1回～第4回の実施から、どのような環境で、どのような課題と向き合ってきたのかを、そして第6回では、手話通訳者の関わりの時間や対価設定の課題についてを、各回の実践を通して得た気づき、新たな問いについて、ナビゲーターの南雲麻衣と和田夏実との対話形式で振り返ります。

東京プロジェクトスタディ1「共在する身体と思考を巡って —東京で他者と出会うために—」とは「コミュニケーションと身体性」をテーマに、写真家、ダンサー、インタープリター（通訳者・解釈者）、参加メンバーとともに、身体性の異なる人々の世界に触れながら、“ことば”による表現だけではないコミュニケーションの在り方を探り、その可能性について考えていく実験と実践の場。2020年8月から2021年3月の期間に実施。

【ナビゲーター】

加藤甫（写真家）、南雲麻衣（パフォーマー・アーティスト）、和田夏実（インタープリター）

【記録・編集・運営】

木村和博（劇作家、編集者、ライター）

【スタディマネージャー】

嘉原妙（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

【参加メンバー】

7名

第1回 ——— 声だけで通訳する？



【日時】

2020年8月23日(日)

【会場】

アーツカウンシル東京ROOM302
(アーツ千代田3331) ⇄ オンライン

主な取り組み

イマジネーションワークショップ

初回はオンラインにてワークショップを実施。どんな人がいるのか、まだ直接お互いの顔がみられない状況で、どのようなコミュニケーションが生まれるのか。まだみぬ遠くにいるメンバーを想像する無限の想像の海に、参加メンバーとともに漕ぎ出す、イマジネーションワークショップで初めましての出会いをスタートさせた。

【内容】

- カメラはオフのまま、Google Documentを用いて音声認識または手入力によるテキストで自己紹介をする
- 参加メンバー各自が思う自分の似顔絵を描いて共有する
- 自分の好きな場所や記憶に残っている場所をGoogle Earthを用いて紹介。その人の記憶の場所へみんなで旅をしながら出会う

【コミュニケーション環境】

- ファシリテーターの南雲さん・和田はカメラONで、それ以外の参加メンバーは声とテキストのみで参加。
- 2名の手話通訳を介して参加メンバーの伝えた内容が南雲さんに伝わる状況。

声とテキストと通訳者を介して出会う

南雲 通訳者のひとりの身体に、その中に参加メンバー7人の声が入っていく形になっていましたね。それをみているわたしからは7人を1つにしたキメラが通訳者の身体を通して現れるみたいな感じでした。7=1みたいな。

和田 確かに声だけを聞いたときって、男性の声や女性の声、話し方やトーンはわかるけど、その人がどんな人で、身体の大きさとかはわからないね。基本的に通訳するときは、話し手の表情、話すときの姿勢とかを把握できる環境で、その人の話を伝えることができるけど、声だけだとその人のことを掴みにくい。だからこそ、声だけでいかにその人らしさを引き出した通訳ができるのかなど、また違った通訳の在り方の可能性が広がるかもしれないと感じた。

南雲 普段だったらその人らしさって動きや顔などからいろんな情報を受け取って伝えていると思うんだけど、それがなくて声だけって、情報が足りないなって思った。だからこそ余計にその人のことを知りたい、物足りないからもっともっと教えて、引き出したい、っていう気持ちが出てきたかも。振り返ってみると、みえないから知りたくなる、感覚を減らすことで飢える、求めるようになる、そこからまた違った味わいのその人に出会えるのかもしれない気がする。

第2回 ——— ズレについて考える



【日時】

2020年9月13日(日)

【会場】

アーツカウンシル東京ROOM302
(アーツ千代田3331) ⇄ オンライン

主な取り組み

わたしたちは本当に出会ったのだろうか。

声とテキストと記憶だけで出会った第1回を振り返りながら、カメラをONにして参加メンバーそれぞれの表情や身体を画面に映しながら出会った。

【内容】

- 出合いの定義とは？ ○新しい挨拶を考えてみよう
- 動きの記憶をもとに『身体と出会う』/ 様々な動作を引き出すワークショップ
- 意識から出会うとする / Google photoに意識(写真)をアップロードしよう

【実施環境】

参加メンバーは全員オンラインでの参加。タイミングを合わせて全員のビデオカメラをONに。手話通訳者もオンライン画面上に映し出す形で参加。ファシリテーターは南雲さん・和田が担当

ズレとリズム

和田 音声書記言語(以下、音声言語)は一軸上でのタイムラインがあるけれど、視覚身体言語と音声言語のスピードの違いによってズレが生じ、途中でポツポツと情報がこぼれ落ちることがある。だから、なんとかそのタイムラインのズレを戻そうとしたり、遅れをつなごうとすると、またズレて断片的になるっていうことがあるよね。

南雲：そうそう。会話の流れがきちんと伝わらないとき、その会話の途中で、間でなくなってしまう情報があって、結局、断片的な情報だけを受け取っていることになってたりする。。その足りないっていう感覚からわからなさ・不安を覚えることがあるね。

和田 たとえば、つたえたいことを「紙」に描くとかも一つの方法としてありかも。誰かが話している途中で、それぞれにいいたいことやつなげたいことを思いついてしまって、言おう、言おうと思って待っていても、話のスピードや話題が変わったりして流れてしまうこともあるし。タイミングって難しいなと思う。

南雲 「待つ」こと自体をみんなにとって心地良いものにしていけるといいな。紙とか別のもの、3つ目の視点となるような媒体があると、考えたり、話したりするときの時間の余裕ができたりするのかもしれないね。

和田 確かに。紙に「描く」姿を目の当たりにしてたら自然と待てるかも。コミュニケーション時の身体や視線がどうなるかも含めて、コミュニケーションの環境をどう設計するかが大切なかもしれないね。

オンライン・オフラインの環境を考える

南雲 第1回と第2回は、わたしたちナビゲーターチームと手話通訳者がスタジオに集まって、参加メンバーはオンラインで参加という形式だったから、オンライン・オフライン両方の環境づくりの試行錯誤をしたね。たとえば、Zoomの画面に映し出される手話通訳の画面の見える方とか、なるべく上半身が見えるようにカメラの位置を調整したり。

和田 それは本当に重要な要素だったと思う。一つひとつ最適解を探りながら進めていった。たとえば、カメラのフレームレートでのズレが起こると手話が読み取れないとかは、解像度が荒くても動きの速度が揃って見えるカメラを選択するとか。

南雲 スタジオでモニターの画面をみているときに、わたしの視界にスタジオにいる手話通訳の動きが入ってくると、どうしてもそっちの動きが気になって画面に集中できない。そのときは、スタジオ内で、どこに手話通訳が居るのが良いのかなど、空間の中での立ち位置もいろいろ考えながら取り組んできた。

和田 あと、オンラインのときは視線問題があった。スタジオに設置されている配信用カメラは高解像度ですごく良いのだけど、どうしても画面内の参加メンバーの視点とズレてしまうと感じてしまって。できるだけ視線があうように、パソコンのカメラを選択したりもしたよね。きれいに画面に映ることもよりも、何ていうか、オンラインだけど目の前で対話しているような実感できるようなコミュニケーションの在り方を探ってきたように思う。

南雲 わたしは相槌をすごく打つようになった。オンラインのマナーとして。ぼーっと画面をみていると回線切れた、止まったみたいな風になっちゃうから。

和田 オンラインだと、いつも手話で会話するときに比べて、会話をつかんだ感覚がすごく薄くなった感じがして。対面の場合はふたりそれぞれのコミュニケーション空間が重なりあってつたえあうみたいな感じがするんだけど、オンラインになるとやっぱりモニターがあって、そののっぺらぼうのようなペラとしたものの中に入って会話する感じがする。

南雲 空気の共有がない分、なんとなくわかるの「なんとなく」が全然なくなっちゃったよね。あと何というか、発言権みたいなものがすごく強くなるように感じる。一つの強い話題を話す人がいるとしたら、その話の線上に、その話し手の言葉や表現に合うような形で自分も話すような感じというか。だから、ぼーっとしているだけだと存在がどんどん薄くなっていく感じがあるね。

和田 ところで、スタディ1のオンラインワークショップで印象的だったことはある？

南雲 箱から出す、つながっていく、伝言ゲームみたいな遊びは楽しかった。つながって嬉しいと体温が上がるみたいなコミュニケーション方法がオンラインでもあり得のこなって思えた経験だった。

和田 音声もそうかもしれないけど、みんなで「同じ」を共有すると気持ちがいいよね。たとえばオクサーマークを全員がするとか、挨拶や反応をみんなで決めて、それぞれに同じ挨拶したりするとつながる面白さがある。あとZoomのときはチャットがあることで、情報の量が声の大きさや、たくさん話せる人によって偏るみたいなことがなくなっていくところがあってすごく良かった。さっき南雲さんがみんなで「待つ」ことを楽しめるようになると良さそうって話にもつながるけど、チャットってどこか副音声的感觉もあってすごく楽しいし、チャットだと誰かがいう（書き込む）のを待つみたいな時間が生まれるのがまた良くて。この副音声的な役割ってとても大事だなんて思う。

第3回 — コミュニケーションの範囲について考える



【日時】
2020年10月4日（日）

【会場】
アーツカウンシル東京ROOM302
（アーツ千代田3331）⇄ オンライン

主な取り組み

撮る/撮られるから、他者の無意識に触れる。
写真撮影を通して起こる関係性の変化を実感する。
さらに違う出会いを得る。

【内容】
○加藤雨さんの写真を鑑賞しながらオープンディスカッション
○ペアになって写真を撮る / 撮られるを实践
○みるという行為を通じて、無意識に触れる

【実施環境】
ROOM302にて初めてオフラインで実施。参加メンバーでペアになり、撮る / 撮られるの写真撮影を实践。手話通訳は南雲さんの近くに位置し、その環境に起こった対話を伝える。ファシリテーターは加藤。

つたえあいの範囲、距離

和田 言語的にどうしても音声言語は自然と耳に入ってくるし、視覚言語は選択的にみるってことになる。通訳者として、そのふたつの言語の間に立つときに思うのは、本当は100% つたえあえたらいいけれど、その伝える範囲の広さ、つまり、何をどこまで通訳するのかということをどう設定していけばいいのだろうかということ。その範囲や距離感を感じ取ることが、もしかしたら共在感覚ということなのかもしれないけれど。

南雲 一番は、目の前にいる人がわたしに対して何を言っているのかをきちんと通訳してほしい。わたしにとっては、その他の周りの話は、何が起きているの？って聞いてから教えてもらえるでもいいかな。誰かにわたしが何かを聞かれたときに、通訳者には、この人がこういう質問をしてるよっていうことと合わせて、今、こういう状態で、この質問がきかれているよっていうふうに説明してくれると良いのかもしれない。たとえば、ワークショップのときって、誰かの言葉に引力がうまれたりするよね。そういうときに、今の状況はこうだよっていう状況説明してほしい。情報の状態を共有してほしいという感じかな。空間の情報を揃えるとか、状況整理があると嬉しいね。

和田 情報や発言にはどうしても引力があるからね。そういう重さや重要度を人は自然に取捨選択しているけれど、今はどんな状態で、どこにどんな引力や会話があって、それぞれの情報の入り口がひらかれていてとか、重要度や引力によってパラメーターの調整ができるみたいな通訳があってもいいのかなって思った。

第4回 ———— その人らしさを捉える



【日時】

2020年10月31日(土)

【会場】

代々木公園

主な
取り
組み

それぞれのもやもやから出会う

その人らしさ、を捉えるにはどうしたらいいのでしょうか。通訳するときに飛び込む、その人らしさはどんなふうに見えてくるのでしょうか。

【内容】

- 自分のもやもやについて考え、共有方法は各自で考えて来てもらう
- 身体ワークショップ「インターネットになってみる」/「真ん中を探す」
- 一人ひとりのらしさを共有する

【コミュニケーション環境】

屋外で実施。参加メンバーはシートに丸く円になるように座り、各自のもやもや考えていることを持ち寄って、各自が考えてきた方法(ワークショップや持ってきたノート、そして語りによって)で共有。手話通訳は発言者の隣に立って通訳を行う。

南雲 わたしは、話し手の過去の経験につながったと感じるとき、その人らしさを感じて惹かれる。「らしさ」を表現するのってすごくエネルギーが必要だけど、迷いつつ話すときの言葉の選び方にその人らしさがみえてくる感じがするかな。

和田 人って、その人の中に水脈みたいなものがあるよね。その人の源になっている活力とか、エネルギー量とか。わたしは通訳するときは、そういうその人の水脈を発見できたら、すごく通訳しやすくなる。研究者だと著書を読んだり、アーティストだったら作品をみたりしてみつけるんだけど、興味深いのが、ときが経ってもその水脈って変わらないんだよね。

南雲 その人らしさの水脈を、初めて会った人からどうやって発見していくかだよ。

和田 この第4回のワークや語りの中で、本当にいろいろなその人自身が出てきて、自分の「らしさ」を持ち寄ってもらった回だったと思う。メンバーの一人がずっと書き綴ってきたノートを初めて自分以外の人に見せてくれて共有してくれたよね。あのノートは、すごくそのメンバーのことを表してた。第4回は、一人ひとりの水脈が出てくる回だった。

人タコに似た仕事

米内山陽子 よないやま・ようこ 劇作家・演出家・舞台手話通訳家。広島県三原市出身。1993年より演劇活動を開始。2008年に出産。2009年より劇作を中心に活動復帰。2012年に同学年女性四人で演劇ユニット・チタキヨを結成。作・演出を担当している。現在は脚本のみならず、演出、舞台手話指導、舞台手話通訳など活動の幅を広げている。現代を生きる人々のみじめでみっともなく、しかし愛しい生き様を執拗に描いている。

同時手話通訳に比べたら、舞台手話通訳(註・舞台作品の進行に合わせて、台詞・音情報などを手話表出するもの)のほうがずっと性に合っていると感じる。

どちらもイタコのような仕事であると思うが、根本的な部分が全く違う。

同時通訳だと、その時の頭の回転のコンディションが如実に表れる。体調が思わしくないときは通訳で表出される「私」の含有量が跳ね上がる。だから直前にブドウ糖やカフェインなどを摂取して、ある種“キマった”状態で現場に立つことが多い。アドリブイタコである。

舞台手話は大部分が事前の翻訳で決まる。俳優の空気と、台詞、そして行間を解釈し、翻訳する。後はそれを身体に染みこませて、なにがあっても出るようにする。脳には少し余白を残しておく。不測の事態に対応するためだ。すなわち、猛練習イタコなのだ。

練習は良い。練習を重ねれば重ねるほど、自分が消えていく。話者に、役になっていく。

しかし不思議なもので、どこまで突き詰めても「自分」がゼロになることはない。翻訳の解釈に、表出のテンポに、半透明のわたしが映り込む。さながら心霊写真だ。「お気づきだろうか、幸せそうな若者の横に霊の姿が……」というやつだ。怖い。

好意的に解釈をすれば、それは個性と呼ばれるのだろう。でも塩梅を間違えると、観客にとっては狭窄物になる。

個性が叫ばれる時代になんと逆行したことをしているのかと思うが、観客が見たいのは作品であって、通訳者の個性じゃない。イタコを頼む人だってイタコ本人と話すのではない。イタコが降ろした親しい人の霊と話したいのだ。

わたしはもう一つ、別のイタコをしている。脚本業である。

わたしの場合、脚本執筆時には自我が邪魔になる。作品世界を翻訳して、登場人物の心の動きを追う。やるべきことはそれだけだ。そうやって頭を世界に明け渡して、その感情やうねりを解釈・翻訳し、他者に伝えるために文字を連ねる。

それは演出家や監督に再解釈され、出演者やスタッフに再々解釈される。まるで伝言ゲームだ。伝言ゲームが故に、完成した作品が執筆したものと乖離していることもある。それを喜ばしく思える場合と、そうでない場合と、どちらも経験しているので脚本上を書く言葉には神経を尖らせる。

シンプルで平易な言葉づかい。解釈のブレ幅を線引くチョイス。複雑なことは解剖して描写し、嘘がなくて出来る

「伝える」

丸山垂穂 まるやま・たりほ 映画字幕翻訳者、手話通訳士。映画好きの両親の影響で子供の頃から洋画邦画を問わず鑑賞。15歳の時に父の仕事の都合で渡仏し、フランス映画に魅了される。帰国後、字幕制作会社で翻訳のノウハウを学んだ後、独立。耳の聞こえない友人とのコミュニケーションを図るために、20年ほど前から手話を学び、現在は字幕翻訳者と手話通訳者の二足の草鞋を履いている。偶然か必然か、フランスのろう学校を描いたドキュメンタリー「音のない世界で」(新訳)を翻訳する機会に恵まれる。

だけ短い台詞を選ぶ。ありきたりを恐れず、飛躍を恐れず、その時に正解だと思える一行を重ねていく。

この作業が一番辛く苦しく楽しいところだ。どうか伝わりますように、という願いを書くと言っても良い。伝わらなければ虚無だ。虚無を書き連ねるわけにはいかない。

イタコの口寄せではどこ出身の霊も(動物霊も!) イタコ本人の訛りで言葉を話す。これはイタコが降ろした霊と感応し、それをイタコが霊的に翻訳するからではないか。イタコは自分を通して、霊が伝えたい何かを、言葉を使って相手に伝える。とても通訳的で、作家的だなと思う。

ここまでイタコをフィーチャーしておいて言いにくいけど、わたしは霊を信じていない。

でも、言葉は結構信じている。

様々な人々が伝えたがっている言葉がある。通訳の現場で出会う話者だったり、舞台に立つ俳優だったり、架空の世界の登場人物だったり、そういう人々から溢れる言葉に体を明け渡す。

今日も、手と頭を動かしている。

子どもの頃から、あまのじゃくだった私は流行しているゲームやブランド品には興味がなかった。どちらかというと、マイノリティに親しみを覚える。私自身がマイノリティだと感じる人が多いからだろうか。16歳の時、父の仕事の都合で1年間フランスで寮生活を送った。“ボンジュール”ぐらいしか知らない日本人の私はマイノリティだった。何とか自分の思いを伝えようと必死にフランス語を学んだ。就職後は会社のような大きな組織が合わず1年で退職。20代後半に映画字幕翻訳者として独立、フリーランスで活動が続けている。今でもハリウッド映画よりマイナーなフランス映画のほうが断然好きだ。マイノリティに魅かれるのは、なぜだろう。自分に欠けている視点を補ってくれたり、無意識の思い込みや固定観念から解き放たれるからかもしれない。

手話との出会いは20年以上前に遡る。息子が通っていた保育園で耳が聞こえないお母さんと知り合った。最初は筆談やジェスチャーでコミュニケーションを取っていたが、「もっと話したい、わかり合いたい」と思うようになり、地域の手話講習会に通い始める。そのうち聞こえない人たちとの交流が楽しくなり(特に飲み会は最高!) 世界が一気に広がった。手話もフランス語も言語だ。「伝えたい」という思いが原動力になっている。

手話通訳者として活動を始めた後、フランスのろう学校を描いた『音のない世界で』、ろうコミュニティのドキュメンタリー『ヴァンサンへの手紙』の字幕翻訳依頼があった。一見、字幕翻訳と手話通訳は接点がないように見えるが、このようにつながり輪が広がっていくのが嬉しい。字幕翻訳は字数制限があるため出版翻訳のように一字一句を訳すことはできない。ジョークやことわざは文化の違いがあるので直訳では伝わらない。意味をつかんでわかりやすく翻訳する。この点では話の内容を簡潔にまとめて伝える手話通訳と似ている。相手に伝えたいという気持ちが一番大切だが、受けとめる気持ちがなければ伝わらない。双方向の対話があってこそ初めて伝わる。手話通訳の場合は、さらにアイコンタクトや表情も大きな要素になるだろう。

字幕翻訳者は映画製作者と観客を、手話通訳者は耳が聞こえない人と聞こえる人をつなぐ。これからも二足の草鞋を履きながら、言葉を通して人と人をつなぐ仕事に携わっていきたい。

犬がわたしのもとにやってきて、背を向けて座り、ちらりとこちらをみつめる。わたしは犬の首にふれ、心地いい場所を探る。それはわたしと犬との間にうまれた会話のコードであり、小さい頃からずっと変わらないコミュニケーションです。こうした時間、ふと、つたえあうことはとても単純なことのようにも思えます。

本企画は、つたえあうこと自体が含む様々な要素、それぞれがすでに身体的に“知っている”(ようにも思える) ことを、通訳という間に立つ存在の身体を通した発見や気づきから、全然異なる人生や経験、身体を持つ他者同士がつたえあうという奇跡に想いを馳せ、ほぐしていくことからはじまりました。

残念ながら、そして当然ながら、コミュニケーションの要素を網羅できるなんてことはなく、思いもよらないコミュニケーションは、日々、みなさんの中にこそ巻き起こっているのだと思います。近づき、遠ざかり、その場で巻き起こる偶然の奇跡、闘争、ざわめき、創発。異なるもの同士のコミュニケーションの矢印がどんな方向に向かっていくか、互いの世界の重なりやつながり、わたしとあなたという最小単位の世界が生まれ、その関係から成る世界が形成されていきます。

今回、本企画で行ったヒアリング調査やインタビューでは、人と人との間に介在する通訳のみなさんの、あの言葉、この表現、この表し方のほうが良かったんじゃないかという意図をつたえることに向き合い、何時間も悩み、反省は尽きず、自分の身体を介しては、つたえられなかったことの多さに苦しみ、それでもつたわる瞬間、意図が達成された喜びや想いに、一瞬嬉しさが駆け巡るという通訳者ならではの視点のお話を聞くことができました。言語や感覚、認識世界

和田夏実 わだ・なつみ ろう者の両親のもとで手話を第一言語として育ち、大学進学時にあらためて手で表現することの可能性に惹かれる。視覚身体言語の研究、様々な身体性の方々との協働から感覚がもつメディアの可能性について模索している。近年は、LOUD AIRと共同で感覚を探るカードゲーム“Quajia”(2018)やたばはやと+magnetとして触手話をもとにした繋がるコミュニケーションゲーム“LINKAGE”、“たちまっち”(2019)など、ことばと感覚の翻訳方法を探るゲームやプロジェクトを展開。アーティスト南雲麻衣とプログラマー児玉英之とともにSignedとして視覚身体言語を研究・表現する実験、美術館でワークショップなどを行う。東京大学大学院 先端表現情報学 博士課程在籍。同大学 総合文化研究科 研究員。2016年手話通訳士資格取得。2017-2018年ICC インターコミュニケーションセンター emergencies1033 “tacit crelele / 結んでひらいて”。2020年東京プロジェクトスタディ1 共在する身体と思考を巡って ー東京で他者と出会うためにーナビゲーター。
<https://www.signed.site/>

が異なる中で、時間や空間に制約がある中で、つたえるを担うこと自体の途方もなさと、だからこそ、人が介在することの可能性がそこにあることを改めて実感しています。

びたつとは決して重ならない世界で、つながりを持とうとする。その過程で全く新しい自分が現れたりもするでしょうし、わかりあえないと思っていたあの人も違うつながり方であれば、共に在ることができるかもしれません。タイミングや間合い、リズム、水脈やメディア、内言語。互いが異なっていることを認識し、その違いを探索しながら、近づいてみる。想像以上に、違う。その事実、まだまだ相手の世界が未知であることを示すと同時に、わたしの世界をも未知の広がりがあることを示しています。それゆえに、まだみぬ創発の可能性があるのだと思います。わたしたちの手には、つたえるを発明する自由があり、そこには幾多もの可能性が広がっています。

記録や保存、メディアについてや視聴覚以外の感覚器官を通したコミュニケーションや情報保障。
本書の中で取り上げることのできなかったことは、まだまだ、まだまだ本当にたくさんあります。本書やカードで遊びながら、様々な方と共に、そして今後の未知なる現場を通して、つたえるを発明することの切実さと魅力に飛び込みながら、これからも幾多もの「つたえあう」可能性を拓いていきたい。本書を手にとってくださったみなさんにとっても、コミュニケーションについて考え、「つたえるを発明する」きっかけに本書がなればと、願っています。

和田夏実

つたえる、うけとる、つたえあう

— interpret 新たなコミュニケーションの在り方を見つけるために —



企画制作：和田夏実

制作協力：南雲麻衣

ヒアリング協力：田中清 瀧尾陽太 小松智美 吉田亜紀

瀧澤亜紀 田中結夏 米内山陽子 藤木和子

インタビュー：南雲麻衣 廣川麻子 佐沢静枝 佐藤涼太郎 瀬戸口裕子

コラム：米内山陽子 丸山垂穂

グラフィックレコーディング→イラスト：清水淳子

デザイン：畑ユリエ

写真：加藤甫、川島彩水

編集：嘉原妙（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

発行日：令和3年7月30日

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス 8階

Tel：03-6256-8435 Fax：03-6256-8829 <https://www.artscouncil-tokyo.jp>

Tokyo Art Research Labとは

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京の人材育成事業として、アートプロジェクトを実践する全ての人々に開かれ、共につくりあげる学びのプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。<https://tarl.jp>

※本冊子はTokyo Art Research Lab 研究・開発の「流通・発信プログラム」の一環として制作されました。

ISBN978-4-909894-25-0 C0070



本カードは、わたしたちが日々、何気なく行っているコミュニケーションについて、3つのSTEPを通して解きほぐし、コミュニケーションの違いや認識のズレを体感しながら共に考えていくコミュニケーションカードです。まずは一人で、次は誰かと一緒に、自分自身の感覚を開きながら、コミュニケーションの世界を探索してみましょう。

STEP 01

わたしの世界

コミュニケーションの伝え手としてのわたしの世界をみてみよう。あなたの頭の中にはどんな記憶が眠っていますか？どんなことが好きで、どんな言葉をよく使っているのか、記憶と経験につながっている「わたしの世界」をほくしてみよう。

STEP 03

関係性の中で

誰かと誰かの中に、その間にうまれるコミュニケーション。関わり合いの中でうまれる言葉や表現について一緒に考えてみよう。

STEP 02

受け取るわたし

コミュニケーションの受け手のわたしについて。あなたはどうなことを想像しながら、相手の話を聞いている？受け取る時の熱量や意識の行方はどんな状態だろう。

STEP 04

つたえるを発明する

STEP01～03までのカードを振り返りながら、そのひとつひとつをヒントに新しいつたえるを発明してみよう。

カードの使い方・遊び方

遊び方① つたえるを深める

- 全てのカードをきって、絵柄が見えないように山をつくります。
- 山の上から、カードを1枚ずつ引き、そこに書かれてあるQ(質問)に答えていきましょう。
- 一人で言うときは、Q(質問)への回答を紙に書いたり、2人以上で行うときは、それぞれに回答して、そこから議論を深めていくのもオススメです。

遊び方② つたえるを発明する

- カードのテーマをもとに、新しいつたえ方・届け方を発明してみよう。
- 温度をつたえる、意識をのこす、記憶を共有する、触れる、描く、撮影する、いろんなつたえ方をつくってみよう。

他にも、使い方・遊び方はいろいろ。

- 紙とペンを用意し、自分の世界と相手の世界を紙の上に描きます。カードを使って、それぞれの世界を線でつないだり、絵を加えたりして、自分と誰かとの関わり合いを図式化してみよう。
- 家族と、友人と、または職場の同僚と、それぞれ関係性が異なるとき、また違う答えが見つかるかも。ぜひ、いろいろな人とやってみよう。
- 情報をつたえるとき、誰から誰に？どんなことを共有する？場のつくり方やその順番をカードをヒントに考えてみよう。

最後に、あなたの周りにあるつたえあい、あなたを起点としてうまれゆくもの。
新しいカードや道具をつくって、つたえる世界をさらに広く深く探してさがしてみてください。

わたしの世界

わたしの世界



わたしの世界にあるものを
5つあげてみよう！

例 | 家族や趣味、好きなもの

わたしの世界

思考のための言語



考えるとき、頭の中に何が
広がっている？映像？写真？
音？言葉？触り心地？

わたしの世界

記憶の中のイメージ



「森」「海」「街」と「町」
いつこのどんな景色が
浮かんでくる？

わたしの世界

あなたを 取り巻く世界の話



あなたの専門や分野特有の
言葉・表現を3つ教えて。

「水脈」の運動法則



Q

あなたを動かす運動法則。
何にときめき、
何に突き動かされる？

()の中のこと



Q

直接？間接？まわりくどく？
スパッと？察してもらえるよう
に？どんな方法で、どんな言
い方でつたえる？

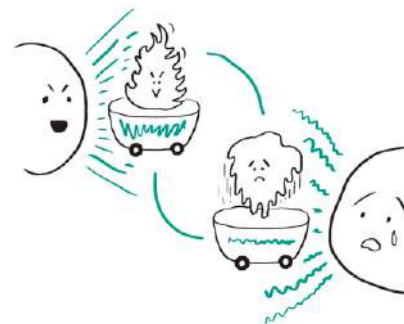
リズム・ノッキング・揺らぎ



Q

あなたの思考のリズムやス
ピードは？じっくり、ゆっくり？
ひゅんっと飛ぶような速さ？

温度について



Q

あなたの中のつたえる温度。
その温度はどんなときに
あがる？

受け取るわたし



Q

受け取るわたしはどんな状態？
相手のことをどのくらい
知っている？

相手の世界にふれる



Q

(頭にある人を思い浮かべて)
その人の世界について
5つあげてみよう。

想像すること



Q

(頭の中に誰かを浮かべて)
どうしてあの人は、ああ言った
のだろう？相手になりきって
想像してみよう。

受け取る熱量



Q

相手のつたえたいことの温度
を熱々のまま受け取るには？
相手が10でつたえろとして、あな
たは3で受けてみる。温度の差に
どう感じたか話してみよう。

意識の行方



Q

誰かの話を受け取るとき、
あなたの意識はどこにある？

関わり合いの中で



Q

あなたを起点にした周りの
世界ではどんな言葉が
行き来する？

関わり・引き出される
言葉・表現

Q

家族・友人・あの人・この人。
誰かとの間で引き出される
言葉や表現はどんなものがある？

うまれゆく言葉・表現



Q

ここ3年間にうまれた言葉・
表現を5つ探してみよう！

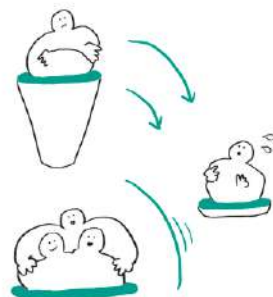
誰から誰に？



Q

ひとり、ふたり、10人、
大勢。誰から誰に？何人くらい
の誰と(に)話す？

場の支配



Q

関係性の重力はどこにある？
スピード、話者、人数など、場
の関係性をほぐしてみよう。

タイミング・間合い



Q

話をつなげるタイミングと間。
あなたはいつどんなふうに
自分の話をつなげていく？

つたえあいのゴール



Q

何が達成されたらスッキリ次
に進むのか？
話のゴールを探してみよう。

情報の優先順位？



Q

あなたの頭の中。つたえたいことをどんな順番で話している？

つたえる芯の部分



Q

つたえたいことを一言でいうと？その芯には何がある？ぎゅっと絞ってあらわしてみよう。

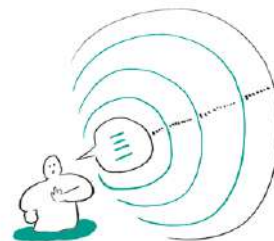
つたえるメディア



Q

紙に書いたり、写真に撮ったり。音にしたり手であらわしたり。イメージや記号、メディアによってどう変わる？

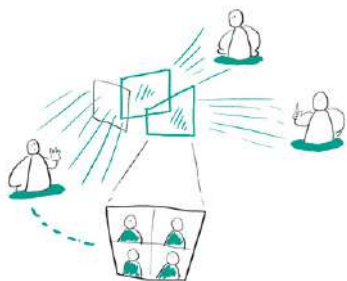
範囲のこと



Q

親密な人や遠くの知らない誰かまで。届く範囲が変わるとつたえ方はどう変わる？

ここにいる？いない？



Q

遠くのあなたとオンラインで話すとき、何が得られて何を失っている？

その人らしさ



Q

あなたらしさはどこにある？“らしさ”を感じる話をひとつ話してみよう。

直接の対話



Q

誰の言葉も借りない言葉や表現による対話を「直接の対話」と呼んでみる。いつどんな方法でそれはうまれるだろう？

つたえるを發明する



Q

いつもと違うつたえ方を發明しよう。新しいつたえ方、どんな方法があり、そこから何がうまれるだろう。